

私はジュリエットが自殺したということを信じているのか¹

—不真面目な発話の真面目な意味論—

木下蒼一郎

gingerale@asagi.waseda.jp

キーワード：フィクション ふり 会話の含意 共通基盤 ごっこ遊び
共同のコミットメント コミュニケーション 資料 によれば

要旨

本稿はフィクションの語りにおける「会話の含意 (conversational implicature)」の理解を分析することを通じて、私たちのコミュニケーションを支えているとされる「共通基盤 (common ground)」には共同のコミットメント (joint commitment) の集合としての側面と「資料 (corpora)」の集積としての側面があるということを論じ、この二面性は互いに互いを排斥するものではなくむしろ相補的なものとして捉えられるべきだということを主張する。これにより、フィクション的文脈において言われたことを私たちがある意味では信じているという直感が掬い取られることになる。

1. 私たちは信じるふりをしているのか

毒で仮死状態となったジュリエットは、目が覚めた時にロミオがすでに自害していたことを認めると、彼の短剣を使ってその後を追った。これは『ロミオとジュリエット』における「事実」だという気がする。あるいは、上のように述べることは、何か「正しい」ことを言うように思われる。仮に「ジュリエットは後追い自殺なんかしてないよ」と言う人がいたとしたら、その人の言うことは「間違っている」と言いたくなる。その人の誤った信念を修正するために、「ほら、ここに後を追ったって書いてあるよ」と言いながら手元の文庫本を開き、該当箇所を指し示すことで「証拠」とすることさえ、私たちはできる。このように私たちは、「フィクションにおける事実」とでも言うべきものを特に苦もなく受け入れて生きている。それが架空のものであるにもかかわらず。

私たちは現に、『ロミオとジュリエット』のストーリーを（追）体験することができる。シェイクスピアが著（し、訳者が日本語へ翻訳）したテキストを読む間、私たちは皇帝派と教皇派の対立に頭を悩ませたり、それを背景とするモンタギュー家とキャピレット家の確執をどこか滑稽に思ったり、その間で板挟みにあつて葛藤する若者たちに共感したり、やがて訪れる様々

¹ 本稿の執筆にあたって、浅岡健志朗氏（東京大学）、氏家啓吾氏（東京大学）、田中太一氏（東京大学）、松田俊介氏（東京大学）に貴重なご意見を賜った（五十音順）。この場を借りてお礼申し上げる。なお本稿は日本学術振興会の科学研究費助成事業による科学研究費補助金の交付を受けて行なった研究の成果である（JSPS KAKENHI Grant Number JP 21J22225）。

な悲劇に胸を痛めたりする。それが架空のものであるにもかかわらず。

彼らが経験した悲劇は現実に起こったことではない。現実に起こったことだという説もあるようだが、いずれにせよ、当時のイタリアにおける皇帝派と教皇派との間にあった対立関係にシェイクスピアが脚色を加えることで出来上がったあの悲劇がフィクションであるということは揺るがない。私たちはその事を理解している。だとすると私たちは、ある意味では、ジュリエットが後追い自殺をしたということの本気で信じているわけではないはずだ。私たちはシェイクスピアのテキストを読むとき、かくかくしかじかの世界・状況・出来事が成り立っているということにしてそれを鑑賞している。さながら子供たちとままごとをするかのように。では私たちは、にんじんを切るふりをするが如く、胸を痛めるふりをしていただけだろうか。あの悲劇を読んで流した（かもしれない）涙は演技だったのだろうか。そんなはずはない、と言いたくなる。私は本当に悲しんだのだ、と。事実として、いわゆる「泣く演技」は難しい。そうだとすると、上演される悲劇を鑑賞して泣いている観客たちが全員泣く演技をしているとは考えにくい。彼らは本気で悲しんでいるのだ。では、本気で信じていないジュリエットの死を本気で悲しむとはどういうことなのだろうか。

本稿は、その第一の課題として、ここにおける「本気ではないが、ある意味では本気である」という矛盾めいた状態がつまりどういう状態なのかという問題を論じ、言語学的な見地から応答することを目指す。ここで「本気で信じているわけではない」と言った同じ口で「本気で悲しんでいる」とも言いたくなるという私たちの直感を説明するにあたって、「言語学的な」理論が持ち出されるのは些か奇妙に思われるかもしれないが、これには「舞台上で俳優が何かを発話し観客がそれを理解するという営みはコミュニケーションである」という、本稿の掬い取りたいもう一つの直感に関わっている。フィクション的でないコミュニケーションに関しては既存の言語学がそれを説明するための道具を豊富に用意してくれており、第二の直感を維持せんとする本稿としては、それらを用いた説明をフィクション的なコミュニケーションに対しても与えることを通じて、翻って第一の直感が説明されることになるということを示すことを目指すことになる。この方針で議論を進めるにあたり、本稿は Stalnaker (1973, 2002, 他) に帰される「共通基盤 (common ground)」という概念が決して一枚岩ではないということを主張する。共通基盤とは簡単に言えば「あるコミュニケーションにおいて、話し手と聞き手との間で当然のこととされている事柄の集合」のことである²。本稿はこの共通基盤という概念の理解につい

² 「共通基盤」をかくの如く理解することが決定的外れではないことは Stalnaker (2002) の次の箇所からも明らかである。

“To presuppose something is to take it for granted, or at least to act as if one takes it for granted, as background information — as *common ground* among the participants in the conversation.” (Stalnaker 2002: 701; イタリックによる強調は原文に準拠)

「何かを前提とするとは、その何かを背景情報——すなわち会話の参加者たちとの間の**共通基盤**として当然のこととすること、あるいは少なくとも、それが当然のこととされているかのように振る舞うことである。」ただし同文献では最終的に次のような定義が提出される。これは議論の末に定式化がより精緻になっただけであって、Stalnaker による共通基盤の理解が変容したわけではない。したがって本稿が「共通基盤」という概念を「あるコミュニケーションにおいて、話し手と聞き手との間で当然のこととされている事柄の集合」として概略することに害はないと思われる。

“The more general notion of common ground should not be just an iterated version of a broader notion of acceptance.

て近年提出されている二つの立場——「共通基盤とはすなわち話し手と聞き手との間の共同的コミットメント (joint commitment) の集合である」という立場 (Geurts 2017) と、「共通基盤とはすなわち話し手と聞き手との間で共有されている資料 (corpora; cf. Lewis 1982, Currie 2010) にほかならない」とする立場 (Stokke forthcoming)——を統合することを提案し、それによって「ふりをする」という概念は前者の意味での共通基盤に、「信じる」という概念は後者の意味での共通基盤にかかわると考えるという新たな道を提示する。これにより私たちは、上で傍点を付した「本気で信じているわけではない」という用語法が実は正確でないという結論に至ることになる。

本稿の構成は次のようになっている：まず2節において、ここまで私の用いた「ふりをする」という言葉およびそれが表している概念が現代の語用論において重要視されるに至った背景を確認し、そこにおいてその言葉が正確にはどういう意味で用いられているのか（あるいは用いられるべきなのか）を詳述する。続く3節において、2節で確認した意味での「ふりをする」という状態がなぜ成立しなければならないのかを Walton (1990) の見解に準拠することで説明する。これにより言語的なフィクションをコミュニケーションとして捉えることの正当性が擁護される。そしてそれに続く4節～5節でコミットメント主義的説明の利点と問題点をそれぞれ指摘し、それを補う考え方としての共通基盤＝資料説を6節において導入する。これにより、異なる文脈で提出されていたコミットメント説と資料説は互いに矛盾せずむしろ補い合うものであるということが示され、「共通基盤の二面的な理解」が本稿の立場として提出されることになる。そして最後に、この二面的理解を踏まえることで冒頭の問いへの「言語学的な」回答が自然に得られるということを7節で述べる。

2. フィクションは「コミュニケーションのふり」なのか

戯曲が上演されている場面において、俳優がセリフを言い観客がそれを聞くという営みは、ちょうど街頭演説がそうであるように、コミュニケーションの一形態であるように思われる。

Successful communication is compatible with presuppositions that are recognized to be false, but the information that they are being presupposed must be actually available, and not just assumed or pretended to be available. Even the liar, if he really intends to communicate, has to believe that the information needed to interpret his lies will really be common ground. So we might identify the common ground with common belief about what is accepted. That is, we might define common ground in the following way:

It is common ground that ϕ in a group if all members *accept* (for the purpose of the conversation) that ϕ , and all *believe* that all accept that ϕ , and all *believe* that all believe that all accept that ϕ , etc.” (Stalnaker 2002: 716)

「より一般的な概念としての共通基盤は、それよりも広い概念である「引き受け」をただ反復しただけのものとするべきではない。首尾よくコミュニケーションは偽だということがわかっている諸前提とも両立するが、「それらが前提とされている」という情報は現に利用可能であるのでなければならず、ただ想定されているだけだったり、あたかも利用可能であるかのようにされているだけだったりはない。たとえ嘘つきであっても、本気で何かを伝えなければ、自分の嘘を解釈するために必要な情報がやがて本当に共通基盤となるのだと信じる必要がある。だから私たちとしては、共通基盤を「引き受けられていることについての共通信念」と同一視してもよいかもしれない。それはつまり、私たちは次のように共通基盤を定義してもよさそうだとすることだ：

あるグループの中で ϕ が共通基盤であるのは、グループのメンバー全員が（会話の目的に照らして） ϕ を引き受けていて、全員が全員が ϕ を引き受けているということを信じていて、全員が全員が全員が ϕ を引き受けているということを信じているということを信じていて……等々であるときである。」

前節でも述べたように、本稿としてはこの直感を擁護したいと考えている。しかしフィクションとして何事かを語る行為は、言語行為論の揺籃期においては周辺のな、あるいは例外的な言語行為であるとして議論の脇に置かれていた。このことは、言語行為論の嚆矢となった Austin (1962) の発言からもはっきりと読み取ることができる：

[...]行為遂行的な発話は、たとえば舞台上の俳優によってなされたり、詩の一節に取り入れられたり、独白として用いられたりした場合には、**ある独特なしかたで空虚にあるいは無効になる**。このことはおよそすべての発話に対して同様に当てはまる——特殊な状況における大変貌というわけだ。そうした状況に置かれた言語は、ある特別な形で——つまりそれとわかるような形で——真面目でなく、しかしそれでいて普通の使用に**寄生するようにして**、用いられている——こうした変貌は、言葉が**色褪せること**についての学説によってこそ取り扱われる。これらすべてを、私たちは今のところ考察の対象から**除外している**。
(Austin 1962: 22; 拙訳、ボールド体による強調は原文のイタリック体に準拠)³

ここでいう「行為遂行的な (performative) 発話」とは、たとえば次のような文を発話する行為のことである。

- (1) a. もしこの議論が間違ったらカレーを一杯奢ってあげるよ。 (作例)
b. (遺言状の中で) I give and bequeath my watch to my brother. (ibid.: 5)
「私は自分の時計を弟に譲り渡す。」

(1a, b) はいずれも、それらを適切な場面で発話することによって約束行為・相続行為を遂行することができるという点で、行為遂行的 (performative) な文であると言われる。ところが、これらの文を劇中のセリフとして、あるいは言語学の論文の例文として用いた場合には、その発話によって本来遂行されるはずの行為が (少なくとも正常には) 遂行されない。(1a, b) を発話する舞台俳優は、もちろん彼の演ずる役柄としては約束をしたり相続をしたりすることになるのだろうけれど、彼自身としてはそうした行為を遂行しているわけではない。同様に、私は (1a, b) をまさにこの紙面上で発話したが、本稿の議論に誤りが見つかった場合に読者にカレーをご馳走する約束などしていないし、弟に時計を相続してもいない⁴。「言葉が色褪せる」とは、まさにこのような文脈における言語の使用に見られる特徴、「現実における効力を失う」という特徴のことである。

³ “[...] [A] performative utterance will, for example, be *in a peculiar way* hollow or void if said by an actor on the stage, or if introduced in a poem, or spoken in soliloquy. This applies in a similar manner to any and every utterance — a sea-change in special circumstances. Language in such circumstances is in special ways — intelligibly — used not seriously, but in ways *parasitic* upon its normal use — ways which fall under the doctrine of the *etiolations* of language. All this we are *excluding* from consideration.” (Austin 1962: 22)

⁴ 筆者には弟がいない。

「現実における効力を失う」という特徴は、なるべく比喩を排した形で言い換えるならば、「その文を発話することによって遂行されるはずの言語行為の責任が、それを発話する主体に帰されることがない」と言い表すことができる。俳優は自身が舞台上で行ったひとつひとつの言語行為の責任を俳優自身として負うことはないし、例文の発話によって本来遂行されるはずの言語行為の責任を言語学者が彼自身として負うこともないのである。このように「責任の帰属」というキー・ワードのもとに「色褪せた言葉」を捉え直すと、行為遂行的でない、すなわち事実確認的 (constative) な (=その真偽が問題となるような) 文の発話も、同様の仕方で色褪せうということに気づく。

(2) 吾輩の辞書に不可能の文字はない。

(作例?)

ナポレオンを演ずる俳優が舞台上で (2) を述べたとしよう。ナポレオンとしての彼は自信たっぷりにこのセリフを述べたが、その演劇には多少の脚色を加えられており、彼が劇中で所有している辞書にはなんと「不可能」の項があった。彼は偽なる陳述を行ったのである。このとき、虚偽を述べたとしてその責任を追及されるのは、つまり「嘘つき」の烙印を押されるのは、誰だろうか。もちろん俳優自身ではなく、役柄としてのナポレオンである。全く同様に、今ここで (2) を例文として挙げた私の手元の辞書には「不可能」が当然立項されているが、私が嘘をついたことにはならない。なぜなら、私は (2) を俳優あるいはナポレオンが述べたものとして提示することで、(2) を発話することを通して遂行される陳述行為の責任主体を俳優やナポレオンに移し替えているからである。

このように「責任」というキー・ワードのもとに整理すると、小説や演劇などといったフィクションにおけるあらゆる発話は (それが遂行的であろうとなかろうと) 色褪せていることになる。というのも、小説家が読み手／聞き手に対して自身の作ったストーリーを語る時、彼は彼自身としてそのテキストを発話しているのではなく、ちょうど舞台俳優がナポレオンを演ずるが如く、「そのストーリーの語り手」という役柄を演じているからである。実際、小説のいわゆる「地の文」として書かれていることや登場人物の口から述べられたことが現実——これは小説中の現実ではなく今あなたがそこにおいてこの文を読んでいるところのその現実である——において成り立っていなかったとしても、その作者は決して「嘘つき」にはならないだろう⁵。小説や戯曲の書き手は一般に、「そのストーリーの語り手」という役柄に語りの責任を移

⁵ もちろん、いわゆる「ノンフィクション小説」や「小説風に書かれた伝記」として著されたものが事実を映し取っていなかった場合にはある程度の責任を問われるかもしれないが、その種のジャンルは、まさにその責任が問われるということを理由として、ここでの「フィクション」には数えないことにする (Walton 1990 はこれについて、フィクション小説とノンフィクション小説とを分ける明確な基準があるわけではないと述べているが、いかにもノンフィクション小説らしいノンフィクション小説と、フィクション小説らしいフィクション小説とがそれぞれ存在するのもまた事実であろう)。とはいえ、たしかにたとえ完全に架空の物語として執筆された小説であったとしても、現行政府への諷刺が度を越していたりなどする場合には何らかの外的な権力が発動し、発禁や焚書の憂き目に遭う場合がある。このような場合は作者の責任が追及されているように思われるし、実際ある程度は追及されているのだろう。しかしそうした場合であっても、「地の文」によって行われた陳述が間違っていたことによる責任がそこで問われているわけではない。そこで問われているのは、そのような小説

し替えているのである。

以上を踏まえると、オースティンの言う「真面目でない (not serious)」「色褪せている (etiolated)」とはすなわち、発話がある種の演技性を伴っているという意味であると考えられる。なるほど私たちは、日常会話において常に別の人間のふりをしながら文を発話しているわけではない。伝聞、引用、モノマネ、ジョークなどといった特殊な文脈でない限り、私たちは自身の発言の責任を別の主体に移し替えたりなどせず、そのまま自分自身としてその責任を負うのが普通である⁶。であれば、より基本的な「ふりでない」ほうから分析してゆくのが道理というものだろう。演技的な発話をオースティンが脇に置いた理由はここにある。彼が不真面目な発話に関して「通常の発話に寄生するようにして、用いられている」と述べていることからわかるように、彼は「言葉の通常の使用があつて初めて、演技的な使用が可能となる」と考えていたのである。

ただし、ここでオースティンの「色褪せた言葉」を特徴づけてくれた「演技 (性)」という概念は、「演技をしている」「ふりをしている」という日常的な言葉が持つ用法のうち、ある特定の用法によってこそ表されるということに私たちは注意しなければならない。「X する演技をしている」「X するふりをしている」という表現は次に見るように、「X の成立に必要な手続きを代行している」と言い換えることが適切となるような読み——以降便宜的に「代行読み」とする——を容易に認可する用法と容易には認可しない用法とがある。

- (3) a. Austin is pretending to be dead. (作例)
b. The actor is pretending to assert that *impossible* is a word to be found only in the dictionary of fools. (作例)

ここで、(3a) はたとえば自身が生存しているということが敵の勢力にわかってしまうと捕虜にされたり拷問されたりするということをオースティンがわかっているという状況における彼の行動を描写したものとして、(3b) はナポレオンを演じている俳優が舞台上で「吾輩の辞書に不可能の文字はない」というセリフを言っている場面を観客の視点から描写したものとして理解

を著し、出版したことに係る責任である。これはちょうど、ある人物が自社のマーケティング戦略について「生娘をシャブ漬け戦略」だと発言し、それがどれほど真実を映し取っていたとしても、「生娘をシャブ漬け」という表現を用いたことそれ自体によって譴責されるといったケースに似ている。これはその発言の真偽に係る責任ではない。このような、いわば「別のレベルで」問われる責任は、本稿がここで問題にしている責任とは質的に異なるものである。

⁶ 「冗談だったら何を言ってもいいのか？」という決まり文句があるが、私はここで「冗談だったら何を言ってもよい」すなわち「冗談であればその発言によって生じたいかなる出来事に関してでも責任を負わなくてよい」ということを主張しているわけではない。冗談のつもりで言ったことが聞き手を傷つける、あるいは通常であれば冗談で済まされるはずのところを、聞き手の認知が歪んでいたばかりに予想外の仕方でも聞き手が傷つく、といった事案は、世の中に掃いて捨てるほど出来ている。たしかに、こうしたケースにおいてジョークのかまし手がその責任を追及されることになるというのは事実である。しかし脚注 5 でも言及したように、こうしたケースで問題になるのは、彼が「(真面目であれ不真面目であれ) かくかくしかじかの言葉を使った」ということに関する責任であり、仮にジョークが成功した場合に「彼はそれを本気で言っているわけではなかった (= 不真面目だった)」という形で別の主体に移し替えられるところの責任ではない。この二つはしばしば混同されるが、質的には異なるものである。

されたい。(3a) が発話されるのを聞いたとき、私たちは普通「“Austin” を用いて指示されるところの人物が本当は死んでいないということが言われている」というふうに理解し、「オースティンが誰かの代わりに死んであげている」という理解はしない。このことから、少なくとも “is pretending to be dead” という述語は「死の成立に必要な手続きをその主語となる名詞句の指示対象が代行している」という読みを容易には認可しないということがわかる。これに対して (3b) のようなケースでは、「主張が成立するために必要な手続きを、役柄の代わりに俳優が（舞台上で）やってあげている」という読みが為されやすい。この読みにおいて私たちが理解するのは、「役柄（ここではナポレオン）による主張行為は確かに遂行されているのだが、その主張行為に必要な手続きは俳優によって代行されている」ということである；もし (3a) がこの意味で解釈され、それが事実であった場合、オースティンは死を成立させるための諸要素を余すところなく代行することになり（たとえそれが舞台上の出来事であったとしても）結果として死ぬことになる⁷。

⁷ ここで問題となっている「代行読み」が認可されやすい例として (3b) を上げるのは不適切であるのご指摘を東京大学人文社会系研究科所属の福井玲教授からいただいた。福井 (p.c.) の指摘は次のように要約される：①ここでわざわざ「俳優」を引き合いに出すことに意味はない；②「俳優」を引き合いに出すことは意味がないどころかミスリーディングである。まず、第一の指摘についてコメントしておこう。この「意味がない」という言葉はおそらく、「それをするのにメリットがない」という意味だと考えられる。「意味がない」をこの意味で解釈した上で応答するならば、本稿としてはむしろ「意味がある」と答えることになろう。なぜならば、(3b) の主語に ‘The actor’ を据えることによってそれを読んだ者の中に「俳優」という職業が想起されることになるからだ。それにより、読者は「(3b) を発話する人物は、舞台上で演劇として行われている行為を描写している」という状況を想像しやすくなり、このことは、本稿がここで問題にしている「代行読み」を読者が実践する助けとなる。この点で ‘The actor’ を主語に据えることには「意味がある」のである。ただ、本稿が「同じ表現のもつ複数の意味」を問題にするからには、ここではミニマル・ペアを提示することが求められるというのはたしかである。この原則に従うならば、本稿としては (3a) と同じ ‘Austin’ を (3b) の主語に据えるべきだろう。なぜなら、さもなくばここで生じている読みの違いが ‘be pretending to X’ という表現が複数の意味を持つことに由来するの、あるいは文を構成するその他の要素に由来するのかが判然としなくなる危険があるからだ。しかしながら、俳優であるオースティンがナポレオンの役を演じているという状況をひとたび考えれば、舞台上のオースティンを指して “Austin is pretending to assert that impossible is a word to be found only in the dictionary of fools.” と述べることは可能であるし、この程度のことは少し考えれば誰でも思いつくことである。この状況における “Austin is pretending to assert that impossible is a word to be found only in the dictionary of fools.” という文の発話が十分「代行読み」的な解釈を認可するものであることを考えると、本稿がここで問題にしている二種類の読みは、その文の主語の形式に依存するものではないと言ってよいだろう。このような理解のもとで、本稿は「ミニマル・ペアを提示する」という作法を犠牲にして、あえて読者の想像の助けとなるような主語を選んだのである。福井教授が「意味がない」という言葉遣いをしたことを考えると、第一の指摘がミニマル・ペアになっていないことに関する指摘であったとは考えがたく、かといって、上記のような誰でも思いつく文脈を福井教授が思いつかなかったとも考えにくい。したがってこの第一の指摘は、読者の想像を助けようという本稿の意図を私がかうまく伝えることができなかったというただ一点に由来すると考えられる。次に第二の指摘、すなわち「俳優」を引き合いに出すことは意味がないどころかミスリーディングである」に回答しよう。福井教授によれば、俳優というのはそもそもここでいう「ふりをする / pretend」のが仕事であるから、(3b) のような「代行読みが意図された文」の主語に「俳優 / the actor」を据えてしまうと、「俳優が二重にふりをしている」ということになるのだという。本稿としては確かに「俳優が二重にふりをしている」ということを意味しようとして (3b) を提示したわけではないため、福井説に従えば、本稿が (3b) の主語を ‘The actor’ にすることはミスリーディング以外のなにものでもないということになる。しかし、「俳優はそもそもふりをすることが仕事である」ということから「俳優が X のふりをしているとき、その俳優は二重にふりをしている」ということが導かれるという推論は、一体どのような理論に支えられているのだろうか。たとえば、言語学者は言語を研究することが仕事である。では言語の研究をしている言語学者は二重に言語の研究をしているのだろうか。消火活動をする消防士は二重に消火活動をしているのだろうか。このように、普通に考えればこの推論がまともな推論でないことは誰にでもわかることである。したがって福井教授があえてこのような指摘をなされたこと背景には何か独特の理論による支えがあるに違いないが、私の理解力不足により、数度のコミュニケーションの過程

私がここで、「主張するふりをする」という表現が代行読みしか許さないということを主張しているわけではないということには注意されたい。たとえばジュリエットが聖職者に変装したロミオと密かに会って話しているとしよう。その途中、彼女は自分たちが遠くから監視されていることに気づいたとする。監視者の位置からは会話の音声は聞こえないとみたジュリエットは、「遠目にはジュリエットが聖職者に対して怒りを露わにして強い語気で何かを主張しているかのように見える表情や身振りをしつつ、音声では次のデートの約束を取り付ける」という行為を遂行し、その場を後にした。これがうまくいけば、監視者としては「何か口論になっていたな。ジュリエットはあの聖職者に対して何かを主張していたようだ。いったいどういうやりとりがあったんだろう？」と考えるだろう。このとき、聖職者に扮したロミオや全てを知る私たちが「ジュリエットが主張するふりをしている」と言うことは適格な言語使用である。そしてこの状況を「ジュリエットが主張するふりをしている」という言葉で表すとき、「責任が別の主体に移し替えられている」だとか「ジュリエットが別の役柄の主張行為の手続きを代行している」という意味は込められておらず、むしろ (3a) の日常的な解釈と同じように、「実際には主張していない」という意味が込められている。したがって、(3b) やそれに類するものが代行読みしか許さないという理解は端的に誤りである。ここでの眼目は、「責任が別の主体に移し替えられている」という意味で“pretend to X”という表現を解釈することが容易である場合とそうでない場合があるということを示すことにある。

ではなぜ代行読みの容易さに差があるのだろうか。その答えは「X するふりをする / pretend to X」という表現に含まれる X が表しうる行為がどのようなカテゴリーに属するのかを考えることで自ずと見えてくる。

- (4) a. 彼は {死んだ／寝た／泣く／殴る／殺す／声を出す} ふりをしている。 (作例)
b. 彼は {主張する／約束する／質問する／命令する／依頼する} ふりをしている。
(作例)

(4a) に列挙したのはいずれも「共同体の慣習」なしに実現することができるタイプの行為または現象を表す表現である⁸。たとえば、私たちはいかなる共同体に属していなくても死んだり泣いたり声を出したりすることはできる。こうしたカテゴリーに属する行為ないし現象を表す表現を「ふりをする」の前に置いた場合、(どういうわけか) 代行含意が生じないことが確認できる。死んだふりをしている人は誰かの代わりに死んであげているわけではないし、声を出すふりをしている人は誰かの代わりに声を出してあげているわけではない。寝たふりや殴るふりも同様である。その成立に共同体の慣習を要しない行為ないし現象は「手続きが代行される」の

でその背景を窺い知ることはできなかった。

⁸ ここで「行為または現象」というぎこちない表現を用いたのは、「死ぬ」「泣く」を「行為」と呼ぶことが耐えられない人々に対する配慮である。ここでのポイントはそれが正確に「行為」であったり「現象」であったりすることではなく、その実現に際して共同体の慣習が必要ないという一点のみなので、表現の不格好さには目を瞑っていただきたい。

ではなく、それによく似た別のもの（たとえば「倒れて動かないこと」や「目を閉じていびきのような音を発していること」など）を以てそれに「見立てる」ということが起こるのである。これに対し、(4b)においては（どういうわけか）代行含意を生じる読みも、すなわち「責任主体を移し替えている」という読みも可能になっているということが観察される。ここに列挙されているのは全て、当該の言語が話されている共同体の慣習なしには遂行することのできない「言語を通じた慣習的行為」——オースティンの言う「発語内行為 (illocutionary act)」——を表す表現である（私たちはこの種の行為の事例を例文 (1a, b) で既に確認している）。ここで言う「慣習的」とは、たとえば単に「もしこの議論が間違っていたらカレーを一杯奢ってあげるよ」に対応する音声を発するだけであればこれといった慣習なしにも十分可能であるが、その音声を発することでカレーを（条件付きで）奢る約束が正しく成立するためには、「その音声を発話するという行為はすなわちカレーを奢ることを約束するという行為である」という慣習が事前に成り立っていなければならない（そうでなければ話し手は、ただ声を出しているだけの、あるいは少なくとも条件文を発話しているだけの人になってしまうだろう）という意味で言われている。この点で主張や約束は——死ぬことや殺すこととは異なり——慣習的行為である。では慣習的行為を表す表現であれば即座に代行含意が生ずるといえるのかということ、次の (4c) を観察する限りそうではなさそうである。

- (4) c. 彼は {結婚する／相続する／チェスを指す／サッカーをする} ふりをしている。
(作例)

結婚、相続、チェスの対局、サッカーの試合はいずれも、かなり複雑な慣習が私たちの間で共有されることによってこそ成立する。したがってこれらは「慣習的行為」であるはずだが、演劇の一場面として結婚式を挙げている——つまり結婚するふりをしている——俳優について「あの俳優は役柄の代わりに結婚の手続きを代行している」と言うのはほとんどの場合不正確な記述となるのではないだろうか。この傾向はサッカーの試合の場合にはより顕著になる。舞台上でサッカーの試合のシーンが演じられる場合、そこでサッカーの試合を成立させるための諸手続きが全て代行されているということはまずない。審判が不在だったり、コートを表す線やゴールが省略されていたり、対戦している両チームが 11 人に達していなかったりすることがほとんどだ。そうした諸要素は、ちょうど死んだふりをする人物が「自身が倒れて動かないこと」を以てそれを「自身の死」に見立てているのと同じように、舞台上の小道具・大道具を以てそれに見立てられる。結婚やサッカーは慣習的であるにもかかわらず、代行されるのではなく見立てられるのである。したがって (4c) は「X をするふりをする」という表現が代行含意を生じさせるための条件として「X が慣習的行為を表す表現である」のみを挙げるのでは不十分だということを示している。

すると私たちとしては、少なくとも「主張や約束や命令行為にあり、結婚や相続やチェスを指す行為にない特徴」を言い当てる必要があるということになるだろう。これには複数の答案が考

えられるが、ここでは私が最も有力だと考える候補者として「それらの行為が表象的内容を持つこと」という条件を推薦したい⁹。ここで表象的内容を持つかどうかは、当の行為が「何かを表している」と言えるかどうかで判定することができる特徴だと定義しよう。たとえば何かを主張する人は、常に何か内容を持った主張をするのでなければならない。言い換えれば、「特に内容はないが、ともあれ主張しているのだ」という主張が真になることはあり得ない¹⁰。それは主張ではない。命令や依頼も同様である。仮に一切の内容を持たない命令／依頼を受けたとすると、いったい何をすればそれに応えたことになるのかわからないし、何も表していない質問はもはや何も尋ねていないに等しいと言える。これに対して、結婚やサッカーは（もちろん特別な場合には何かを表しているということがあってもよいだろうけれど）常に何かを表していなければならないというわけではない。「彼の結婚は何かを表象しているわけではないが、ともあれ彼は結婚したのだ」ということは十分ありうるし、サッカー選手が自身が試合中に行ったヘディングの表象的内容について責任を問われている場面を私は見たことがない¹¹。この候補者、すなわち「表象的内容を持つかどうか」という基準が適切なものであるとすれば、「X をするふりをする」という表現が X の代行含意をもつための必要十分条件は次のようなものであるという仮説が成り立つ。

(5) 「X をするふりをする」という表現が X に関する代行含意をもつのは次の I ・

II が共に成り立つとき、そしてそのときに限る：

I. X が慣習的行為を表す表現である。

II. X が表象的内容を持つ行為を表す表現である。

これを踏まえると、オースティンの言う「寄生的な発話」を特徴づけるのは、ここで言う代

⁹ 他の特徴ではなくあえてこの特徴を推薦することにこれといった根拠はない。何となくそんな気がするだけである。したがって本稿を批判したければこの辺りが狙い目だということになる。

¹⁰ 「犬は犬だ」「ロミオはロミオだ」などといった文（恒真文）はどのような文脈でそれを発話したとしても真になるために「情報がない」「無内容である」などと言われることがある。あるいは「彼はロミオであり、かつ、ロミオではない」という文（矛盾文）はどのような文脈で発話されても偽であるために、これも「情報がない」とされることが多い。このことが念頭にある人は、「恒真文や矛盾文を用いた主張行為に関して、「特に内容はないが、ともあれ主張しているのだ」と述べることは十分正しいことを言っている。それゆえ「特に内容はないが、ともあれ主張しているのだ」が真になることはあり得ないという主張の方こそ真ではないだろう」と思うかもしれない。しかしここでの「表象的内容がない」は恒真文や矛盾文について言われる「情報を持たない」と同じ意味ではない。恒真文であれ矛盾文であれ、それらが恒真である／矛盾であるということがわかるのはそれらを構成する表現およびその全体（を発話する行為）が表象的内容を持っているからにほかならない。反対に表象的内容を持たないのであれば、その文（を発話する行為）は恒真にも矛盾にもなり得ない。したがって、「特に内容はないが、ともあれ主張しているのだ」という主張が真になり得ないという本稿の主張は、「内容」を「表象的内容」という意味で解釈する限りにおいて、十分正しいことを言っていると言ってよい。

¹¹ 結婚披露宴においてマイクを向けられた新郎が「私たち二人にとってこの結婚は、決してゴールではなく、幸せな未来への第一歩を表します」などといったコメントを残すことは極めて多いが、この新郎は決して「結婚という行為が「幸せな未来への第一歩」という表象的内容を持つ」ということを主張しているわけではない。もし彼の結婚が本当にそうした表象的内容を持つのだとすると、彼にとっては「私たちは幸せな未来への第一歩を踏み出しました」と発話することと「私たちは」と言った直後に結婚し、すぐさま「を踏み出しました」と発話すること」が全く同じ意味を持つということになる。さすがの新郎も、このような主張をしているわけではないだろう。

行含意を持つほうの「演技」ないし「ふり」であるということになる。私たちがフィクションを語る時、その語りの責任は「語り手」という架空の主体に移し替えられている。ただしこれは「語りではない何か語りに見立てられている」ということを意味しない。責任が移し替えられた「寄生的な」ものであるとはいえ、語りはその手続が代理人によって完全に踏まれているのである。

3. フィクションの鑑賞をごっこ遊びへの参加として捉える

言語的フィクションを構成するテキストはすべて（本稿での意味において）その作者による「真面目でない」発話によって構成されている¹²ということを確認した。この観察は確かに間違っていない。しかし私たちはこれと同時に、次のことを心に留めておかなければならない。すなわち、小説や演劇を構成する発話が真面目でない——演技性を含む——ことは、その小説や演劇がフィクションであることの原因ではなく、むしろ結果であるということだ。

このことを特に強調しているのはケンダル・ウォルトンである。彼はフィクションをめぐる著名な論考 (Walton 1990) において「フィクションは言語を媒体とするものに限られるわけではなく、絵画や彫刻もそれに含まれる」という立場を取り、まさにその立場を主要な根拠として、断定や約束といった言語行為の「ふり (pretence)」あるいは演技こそがフィクションを構成するという考え（たとえば Searle 1975）を批判している。

発語内行為のふり説や発語内行為の表象説といった虚構理論の困難は、論題の部分的な取り扱いに応じて生じた表面的な困難ではない。[...] こういう理論は核心部が間違っているのである。この二つの理論の核心は、フィクションが「真面目な」言説 [discourse] に寄生しているという考え方である。[...] 虚構の作品——少なくとも絵画や彫刻作品——は、何か「真面目な」使い方があるような種類のものではない。絵画や彫刻が虚構的なものとなるために、言語や絵などを含んだ「真面目な」言説といったものが存在せねばならないとか、そういう

¹² たしかに小説や漫画のジャンルによっては、「地の文」において作者が作者本人として語り始める瞬間が含まれているような作品も存在する。現代日本においてしばしば「メタ発言」と呼ばれるものもこの一種であろう。この種の発話には少なくとも次の3通りの場合が考えられる：①突然正気になった作者が自分自身として喋り始めてしまっているケース；②明示的に「本人役」としてそのテキストが発話されているケース；③そのテキストの主体が作者本人であるということが作中に明示されているわけではないが作者の声として解釈することが読者の間で通説になっている（あるいはそう考えないと辻褄が合わない）ようなケース。これら三種類の「メタ発言」に関しては、著者がその責任を引き受ける可能性があるという点で「色褪せていない」のではないかという指摘があるだろう。しかし、「責任を引き受けない」という選択肢が残されているということだけでも、この種の発話を通常の発話ではない「不真面目な」ものとして取り扱うのに十分な理由となる。私たちの日常会話における発言は、自分自身の言葉としてそれを述べている限りは、その責任を負わなくてもよい瞬間などないからだ。いま、ある小説家とその友人が食事に行ったとしよう。この小説家は上の①～③のいずれかの方法でpを主張している。友人が「そういえばお前、あの作品の中でpって言ってたよな」と作者に言う。ここでこの小説家は「確かに言ったね」と責任を引き受けても良いし、「そんなことは言っていない、だって小説の地の文だろう？」と白を切ることもできる。つまり、「作者による（登場人物による、ではない）メタ発言」といっても、逃げ道はまだ残されているのである。このように考えると、ここで私が「フィクションのテキストはすべて、その作者による「真面目でない」発話で構成されている」と真面目に述べることに問題は無いように思われる。

言説の何らかの概念を誰もが持たねばならない、などと想定する理由が私にはわからない。虚構という概念は、「真面目な」言説の概念に寄生してはいない。(Walton 1990: 84-85¹³; 田村(訳)2016: 85; ブラケットによる注釈は引用者による)

ここでウォルトンが批判しているのは、「作者がしかじかのふりをしていること」を、その作者によって作られたものが虚構性を帯びるための必要条件とみなす考え方である。たしかに彼の言う通り、あらゆるフィクションを構成するあらゆる要素が、なんであれその「本来の用法」のようなものに寄生して用いられていると考えるのは無理があるだろう。画家が架空の風景を描くときに限って「目の前の風景を描くふりをしている」というのは不可解な考えであるし、映画の監督やカメラマンが「しかじかの事実を撮影するふりをしている」というのは言語行為の理論に汚染された観察であると言わざるをえない。彼らは何か別のことを以て絵筆やメガホンをとる行為に見立てているわけではないし、それらの行為を代行することによって責任を別の主体に移し替えてもいない。

このような批判をした上でウォルトンは、「ふり説」よりも一般的な原理として「フィクションを鑑賞する際の私たちは、ちょうど子供たちがごっこ遊びに参加するようにして、ある事柄が(フィクション的に)真であるということ信じよう何らかの形で指令 (prescription) を受けている」というものを提出する。ある特定の種類のフィクションに観察される「言語行為のふり」は、そこに開かれているごっこ遊びへ作者と鑑賞者が「参加する」ことで生まれる副産物だと言うわけである。

例を通して考えよう。いま、太郎と二郎がヒーローごっこをしている。ヒーローに扮する二人は、近くにある木を怪獣に見立て、それをやっつけようとしている。この場合の太郎と二郎は、彼らがこのごっこ遊びを中止しない限りにおいて、「太郎と二郎のすぐ近くに怪獣がいる」(以降 p とする) ということを引き受けている。反対に、もし彼らが p を引き受けていなかったとしたら、それはすなわちヒーローごっこに参加していないということになるだろう。二人はそのごっこ遊びに参加する限りにおいて、自分たちがヒーローであることやすぐ近くに怪獣がいることやそれをやっつけなければならないことなどといった様々なことをひとまずは引き受けるよう制約されているのである。

ここで注意すべきは、太郎や二郎がただ個人的に p を真だと思えばごっこ遊びが成立するというわけではないということだ。なぜなら、太郎がごっこ遊び中の台詞として「今だ、足を攻撃しろ！」などと二郎にむけて発話しようと思うためには、太郎は二郎が p を引き受けているということを引き受けていなければならない¹⁴し、二郎がこの太郎の発話を「ごっこ遊

¹³ “It is essential to see that the ills of the theories of fiction as pretended and as represented illocutionary actions are not superficial ones that might respond to topical treatment. [...] The core of both of them is the idea that fiction is parasitic on “serious” discourse [...] [W]orks of fiction — pictorial and sculptural ones at least — are not things of sorts which need have any “serious” uses. Indeed, I see no reason to suppose that there must be any such thing as “serious” discourse, involving language or pictures or anything else, or that anyone must have any conception of such, in order for pictures and sculptures to be fictional. The notion of fiction is not parasitic on that of “serious” discourse.” (Walton 1990: 84-85)

¹⁴ ごっこ遊びであろうとなかろうと、自身の目の前に怪獣がいるということを理解していないと思われる人物

びの中のセリフとして言われたもの」として理解するためには、二郎も太郎が二郎が p を引き受けているということを引き受けているということを引き受けていなければならない¹⁵からだ。こうした「引き受け」の系列は無限に続き、かつ、 p 以外のことに関しても同様のことが成り立つ。つまり、二人で「一緒に」ごっこ遊びをするためには、同一のひと揃いの規則群を共同的に (jointly) あるいは相互的に (mutually) 引き受けなければならないのである。ウォルトンが「参加」と言うとき、このような仕方でも無数の規則群を引き受けてそれに従うような態度が意図されている。

これを踏まえて、ウォルトン説のもとでフィクションの鑑賞者の場合を考えてみると、鑑賞者が作者によって（あるいは舞台や額縁や銀幕によって）開かれたごっこ遊びに「参加」しているとき、すなわち、そのごっこ遊びの入口に漂っている「しかじかのことを想像せよ（引き受けよ）」という指令 (prescription) を鑑賞者が引き受けているとき、キャンバス上の絵の具やスクリーン上の光の移り変わり、そしてインクの染みによって意味される内容が虚構性を帯び、と考えることになる。たとえば、この論文をここまで読んできたあなたは、この二つ前の段落で「いま、太郎と二郎がヒーローごっこをしている。ヒーローに扮する二人は、近くにある木を怪獣に見立て、それをやっつけようとしている」という一節を読んでいる。そこであなたが想像するよう指令を受けていた「太郎と二郎のヒーローごっこ」的一幕は、もちろんフィクションであり、作者は私である。私はまさに上のフレーズを書いてあなたに読ませることによって、「太郎と二郎がヒーローごっこをしている」ということを私と一緒に（共同的に）信じるよう指令を発していたのである。このことは、私が先ほどの「地の文」の代わりにイラストや漫画を掲載していたとしても、動画サイトへ遷移する QR コードを貼り付けていたとしても、精巧な彫刻によって太郎たちの物語を見事に表現して見せていたとしても、同様に妥当である。もし本稿の説明に用いる例として上の一幕が正しく機能していたのだとすれば、それはまさしく、あなたが私によって提示された規則群を受け入れ、私とのごっこ遊びに参加していたということにほかならない。

ウォルトンの言うようにごっこ遊びへの参加がフィクションの鑑賞を特徴付けるのだとして、そのことがなぜ、オースティンの言う「色褪せた言葉」を生み出すのだろうか。前節での議論が正しければ、色褪せた言葉は「別の主体への責任の移し替え」という意味での演技によって特徴づけられるのであった。そしてこの意味での演技は「何か別のことを以てそれに見立てる」ことによってというよりもむしろ「手続きの代行」によって成立するということを私は強調した。するとここにおける問いは、ごっこ遊びへの参加がいかんにして本稿の言う「見立て」や「代行」を生み出すのか、という形で問い直されることになる。

に対して（たとえその人がヒーローであっても）このようなセリフを言おうとは思わない。

¹⁵ 自分が目の前に怪獣がいると思っていることを理解してくれている人からのセリフでないと、ごっこ遊びのセリフなのか「正気の」発話なのかかわからない。これはたとえば、太郎ではなく近くを通っただけの学校の先生が二郎に「今だ、足を攻撃しろ！」と言った場合を考えれば即座に理解されよう。この場合の二郎は「太郎と自分がいまヒーローごっこをしていて、目の前の木が怪獣に見立てられている」ということを先生が理解しているのかどうかすぐには判断がつかず、一瞬「え？ 先生？」となるはずだ。

もう一度例を通して考えてみよう。いま、ジョンとメアリーが「ロミオとジュリエットごっこ」をしているとする。メアリーが自分の家のバルコニーで街灯を見上げて「ああロミオ、ロミオ、あなたはなぜロミオなの」と独り言¹⁶を言ってから部屋に戻ろうとし、バルコニーの下の茂みでそれを聞いたジョンが「ジュリエット、待ってくれ」と彼女を呼び止める。ここにおいて、ジョンとメアリーの二人が同じごっこ遊びに（ウォルトンの言う意味で）参加しているということに疑問を差し挟む余地はないと仮定しよう。つまり、ジョンが「もしかしたらメアリーは僕が茂みに隠れているのをかくれんぼの合図だと思っているかもしれない」という疑いを持っていたり、メアリーが「私がジュリエットの独白を引用してもジョンは教養がないから私が何をしているのかわかってくれないかもしれない」と心配していたりするといったことはなく、二人は相互に通じ合っていると仮定するのである。このとき、二人の想像の中では、メアリーの家のバルコニーはジュリエットの家バルコニーに見立てられており、メアリーの家のすぐ近くにある茂みはジュリエットの家すぐ近くにある茂みに見立てられている。このほかにも、ジョンとメアリーが立っている土地はヴェローナの街の一部に見立てられているし、メアリーが見上げている街灯はジュリエットが話しかけている月に見立てられている。そしてメアリー自身はジュリエットに、ジョンはロミオに見立てられており、メアリーの「ああロミオ、ロミオ、あなたはなぜロミオなの」という質問とジョンの「ジュリエット、待ってくれ」という命令はそれぞれジュリエットによる質問とロミオによる命令に見立てられている。こうして挙げていくとキリがないが、これらは全て「本当はそれではないものが、あたかもそれであるかのように捉えられている」ものである。言い換えれば、「ロミオとジュリエットごっこ」の世界を構成するもののいくつかと現実の世界を構成するもののいくつかとが、ごっこ遊びの規則群を引き受けた二人の想像を介して対応づけられているということである。

このような、「ある世界の内部においてそれとは別の世界の内部の対象に対してごっこ遊びの規則群に従った対応関係を見出されている対象」のことをウォルトンは「小道具 (props)」と呼ぶ。この意味での小道具が参与すべき対応関係は、程度の差こそあれ双方向的なものである。つまり、現実の世界で小道具の資格を得ているものに対して何かが起これば、（ごっこ遊びに参加する人々の想像力を介して）それに対応するフィクション内の対象にも何かが起こることになるし、その逆もまた真であるということだ。たとえば仮にメアリーが「ああロミオ」までを発話してしばらく言い淀んだとしたら、キャピュレット家のバルコニーにいるジュリエットもまたその間は言い淀んでいることになる。反対に、彼らの「ロミオとジュリエットごっこ」におけるオリジナル・シナリオとしてキャピュレット家の茂みが刈り取られるようなことがあれば、ジョンはメアリーの家の近くの茂みを手で筆り取るかもしれない¹⁷。このように「小道具」とは、現実の世界とごっこ遊びの世界とを対応づける結び目であると同時に、二つの世界における出来事を双方向的に連動させるための一対の歯車としても機能するような仕方で捉えられる諸対象のことをいう。したがってごっこ遊びの世界と現実の世界を繋ぐものは全て小道具で

¹⁶ しばしば誤解されているが、この有名なセリフはジュリエットの独り言である。

¹⁷ ジョンはおそらく後で叱られるだろう。

あり、小道具のみが二つの世界を繋ぐ。すると私たちがごっこ遊びの世界のうちに何事かを引き起こし、そのシナリオを前に進めるためには、私たちは常に小道具に対して何らかの働きかけを行わなければならない。それは街灯や茂みであるかもしれないし、メアリー本人や、メアリーによる発話という行為そのものであるかもしれない。

(6) a. メアリーがジュリエットのふりをしている。

b. メアリーが「ああロミオ、ロミオ、あなたはなぜロミオなの」と質問するふりをしている。

(6a, b) はそれぞれ、2 節で確認した「見立て」のふりと「代行」のふりの用例である。ここまでの「小道具」の理解のもとでこれらを今一度見比べると、(6a) はメアリー本人が小道具となっているケースに相当し、(6b) はメアリーの言語行為が小道具となっている事例にそれぞれ相当するということがわかる。前者の関係に関してはメアリー本人とジュリエット本人との間の単純な小道具的対応関係と考えて良さそうだが、後者の場合はそう単純ではなさそう。というのも、メアリーがメアリーの使っている言語（おそらく現代英語だろう）での質問行為を完遂せず言い淀んでしまった場合にジュリエットによる 14 世紀のイタリア語を用いた質問行為が成立したとはみなされない、という先述のことを考えると、この場面で小道具となっているのは「メアリーが自身の口から音声を発したこと」というよりもむしろ、「メアリーが自身の言葉で質問行為を遂行したこと」と考えた方が正確であろうからだ。ここに、本稿の言う「見立て」と「代行」の相違点の源泉を見出すことができる。すなわち、「見立て」と「代行」は、小道具的対応関係の一種であるという点では共通しつつも、その対応関係が成り立っているレベルにおいて異なっているのである；前者では、ごっこ遊びの規則群を除いた事前の慣習を必要としない行為および現象のレベルにおいて小道具的対応関係が成り立ち、後者ではそうした慣習を必要とする行為のレベルにおいてそれが成り立っている——この観察は、「ふり」という言葉の「代行読み」（この場合は「メアリーが質問行為を構成する慣習の手付きをすべて踏んだ上でその行為に係る責任をジュリエットに移し替えている」という読み）というものは、ごっこ遊びにおける無数の小道具的対応関係のうち慣習的行為同士の間で成り立っているものに私たちが意識を向ける場合にこそ実現するものである、という見方に私たちに誘う。そして私たちがこの誘いに乗ることはすなわち、フィクションの成立においてはまず小道具的対応関係が複数のレベルで無数に成り立ち、次に、そのうちのいくつかが「見立て」的なふりおよび「代行」的なふりとして見出される、という順序を認めるということにほかならない。

以上の議論により、フィクション一般を特徴づけるのは、そこにおける言語行為が「真面目でない」「色褪せている」という事実よりもむしろ、「ごっこ遊びに参加する」という態度、およびそれに伴って出現する無数の小道具的対応関係であるとする説が擁護された。本節の冒頭にある「小説や演劇を構成する発話が真面目でない——演技性を含む——ことは、その小説や演劇がフィクションであることの原因ではなく、むしろ結果である」というフレーズはここに

見られる順序の転倒を指す意図で言われている。これはつまり、私たちが2節で確認した「真面目でない」(=言葉が色褪せている／演技性を含む) という特徴は、そこで参加したフィクションがたまたま言語的な特徴を備える場合に限って現れる副産物として捉える方が理にかなっているということである。

4. ごっこ遊びへの参加を一時的な共同のコミットメントとして捉える

ウォルトンの言う「ごっこ遊びへの参加」という概念は、相互的な信念 (mutual belief) を取り扱っているという点で、いくつかのコミュニケーションの理論 (e.g. Stalnaker 1973, 2002, Schiffer 1972, Gilbert 2014, Geurts 2017, 2019) と親和性が高い。とりわけ、私たちと同じく「通常のコミュニケーションの延長線上でフィクション的な談話を理解する」というモチベーションをはっきりと表明している Geurts (2017)¹⁸ は、ウォルトン的な意味での「フィクションへの参加」を「共同のコミットメント (joint commitment)」という概念のもとに捉え直すことを提案している。

ガーツの言う共同のコミットメントとは、簡単に言えば、(それがごっこ遊びであろうとなかろうと) 私たちが何かをだれかと「一緒に」行っているときに当の私たちの行動を縛る社会的な制約のことである。たとえば、ジョンとメアリーと一緒に机を運んでいるとしよう。「一緒に机を運ぶ」というこの仕事は、その机を部屋の特定の位置まで運べば完了である。このとき、たとえばジョンが何の断りもなしに突然机から手を離してどこかへ行ってしまうたり、歩幅を合わせずに一人でどんどん先に進もうとしたりした場合、メアリーにはそのことを咎める権利がある。この事情はジョンとメアリーの立場が逆であっても変わらない。「一緒になって (as a body; cf. Gilbert 2014)」机を運んでいるジョンとメアリーは、その共同の仕事に「参加している」以上は、お互いがお互いに対して、机を運ぶことにまつわる一定の責任を負っており、自分一人の存でそれを反故にすることはできないのである (そしてもちろん、二人はそのことを互いに了解しており、かつ二人は二人がそのことを互いに了解しているということをお互いに了解しており、かつ……という上のヒーローごっこ事例で見たようなことがここでも成り立っている)。

ここにおける「責任を負っている」と表現されうる社会的なステータスが、ガーツのいう「コミットしている (be committed)」という状態である。

コミットメントとは、二人の個人 a, b と命題的内容 φ との間の三項関係である。これを私は「 a が b に対して φ に沿って行動するようコミットしている」

¹⁸ “In modern times, storytelling has mostly become a drawn-out process, in which production and consumption are separated by long stretches of time, sometimes even millennia. Yet, fiction remains a form of communication, i.e. social interaction, and that’s how I propose to consider it here.” (Geurts 2017: 54)

「現代では、物語を語ることは多くの場合時間的な隔たりのあるプロセスとなっている。生産と消費は長い時間の幅によって隔てられ、時には1000年単位で離れることさえある。とはいえ、フィクションがコミュニケーションの一形態、すなわち、社会的なやりとりであることに変わりはない。そしてフィクションをそのようなものとして捉えることが、私がここで提案することである。」

と言います。ここにおいて φ が真であることは含意されていない。つまりコミットメントは命題的態度として捉えることができ、 a と b とが同じ人物でない限りにおいて、コミットメントは心の状態ではなく社会的な関係である。(Geurts 2017: 55; 拙訳、下線による強調は引用者による)¹⁹

ガーツはコミットメント一般をこのように規定している。ここでのポイントは、コミットメントが a や b の「心の状態 (mental state)」ではないという点だ。あくまでも「社会的な関係 (social relationship)」であるということを明示することで、ガーツは「 a や b が φ を信じているのかそれとも信じているふりをしているのか」という厄介な問題に足を踏み入れることを巧妙に回避しているのである。そして「共同コミットメント」は、上の意味でのコミットメントが相互に共有された場合のものとして定義される。

原則として、コミットメントは共有されることになっている：もし a が b に対して φ に沿って行動することにコミットするならば、よほどのことがなければ b は a のコミットメントに対して同じコミットメントでもって応えることが期待されるし、よほどのことがなければ実際そうするだろう。共同コミットメントは次のように、共有されたコミットメントによって定義することができる： a と b とが φ に沿って行動することに関して共同コミットメントをもっているのは、彼らが：

- ① φ に沿って行動するというコミットメントを共有しており、
 - ② ①に沿って行動するというコミットメントを共有しており、
 - ③ ②に沿って行動するというコミットメントを共有しており、
- (以下同様)

であるとき、かつそのときに限られる。(loc. cit.; 拙訳)²⁰

このように定義される「共同コミットメント」は、上に見た「一緒に机を運ぶ」といった虚構的でない共同行為のみならず、避難訓練などの虚構的な共同行為をも特徴付けてくれる。いま、ジョンとメアリーが「地震が起きた」という想定のもとで避難訓練を行なっているとしよう。彼らは閉じ込められることを防ぐためにドアを開けたり、ガスの元栓を閉めたり、机の下

¹⁹ “Commitment is a three-place relation between two individuals, a and b , and a propositional content φ , which I read as “ a is committed to b to act in accordance with φ ,” without implying that φ is true. Hence, commitments may be seen as propositional attitudes, though as long as $a \neq b$, they are social relationships rather than mental states.” (Geurts 2017: 55)

²⁰ “As a rule, commitments are supposed to be shared: if a commits himself to b to act in accordance with φ , then ceteris paribus b is expected to reciprocate a ’s commitment, and will do so, ceteris paribus. Joint commitment may be defined in terms of shared commitment, as follows: a and b have a joint commitment to act in accordance with φ iff they:

- (1) share a commitment to act in accordance with φ ,
 - (2) share a commitment to act in accordance with (1),
 - (3) share a commitment to act in accordance with (2),
- and so on.” (Geurts 2017: 55)

に潜ったりした後、あらかじめ指定されている避難場所に移動することだろう。さて、そうした訓練の途中、ジョンが急に我に帰って「あれ、僕たち何やってるんだろう、地震なんか起きてないじゃん」と言い出したらどうだろうか。このときのメアリーとしてはやはり、「なに言ってるの、一緒に訓練するって言ったじゃん」などと言って彼を咎める権利があるはずだ。なぜなら、ジョンとメアリーは①～③の系列に少なくとも示されている通り「地震が起きた」ということに沿って行動するという事にコミットしているということそれ自体にそれぞれがコミットしているということとを共有しているのであるから、メアリーはジョンがメアリーがジョンが第一のコミットメントを一方的に反故にする権利がないということを知っているということを知っているということを知っており、ジョンもまたそのことを知っているはずだからだ（つまり、「え！ メアリーがそのことを知っているなんて知らなかったよ！」という言い訳は通用しないということだ）。ここには、ちょうど一緒に机を運んでいたときの二人の間に見られた社会的な制約と並行的なものが観察される。避難訓練というフィクショナルな共同行為であったとしても、それが誰かと「一緒に行く」ものであるからには、互いが互いに対してある一群の命題（たとえば「地震が起きた」ということ）に沿って行動する責任を負う、すなわち、そのことに共同的にコミットすることになるのである。

このように共同的コミットメントという概念を取り入れると、私たちは虚構と現実双方の共同行為を統一的な観点から特徴付けることになるが、これは決して、虚構と現実の区別がなくなるということの意味しない。Geurts (2017) も指摘するように、ごっこ遊びや避難訓練といった虚構的な共同行為を成り立たせる共同的コミットメントは、通常のそれと異なり、「一時的にしか成り立たない (“only hold provisionally”; *ibid.*:56)」という特徴を持つ。これはたとえば、ある場合には「お腹減ったしそろそろ帰るか」という太郎の一言であったり、ある場合には「以上で避難訓練を終わります」という先生のアナウンスであったり、またある場合には「はいカット～！」という監督の掛け声であったりするような、何らかの合図によって、フィクショナルな共同的コミットメントは無効になりうるということである。その瞬間人々はいわば我に帰り、彼らの行動を制限していた「期限付きの共同的コミットメント」はその役目を終えることになる。これに対し、通常のコミットメントの場合はそうはいかない。私が友人にカレーを奢る約束をしたのであれば、実際にカレーを奢らない限りこのコミットメントがなくなることはない。私がどんなにカレーを奢らなくなかったとしても、「はいカット～！ 以上で現実を終わります」などと言って現実を取りやめには許されない（「できない」ではない）。これは大きな違いである。このようにコミットメントの種類として期限付きのものとしてでないものがあるのだとすれば、それによって私たちは虚構と現実を区別することができるということになる。すると私たちは、ウォルトンの言う「ごっこ遊びへ参加している／していない」という二つの状態を「一時的な共同的コミットメントを共有している／していない」という状態に対応させることで捉え直すことになる。これがガーツの狙いである。

5. コミュニケーションにおける共通基盤は共同のコミットメントそのものなのか

既に見たように、ガーツはコミットメント一般を「社会的な関係」として定めている。こうすることで彼は、ジョンとメアリーが避難訓練に従事するときに「地震が来た」ということを信じているのか信じていないのか、あるいは信じるふりをしているのか、といった問題に立ち入ることなく議論を進めているのであった。この線引きが意図的なものであることは、彼が「共同のコミットメント」という概念によって、より人口に膾炙した概念である「共通基盤 (common ground; Stalnaker 1973, 2002)」を捉え直そうとしていることからはっきりと読み取れる。

コミットメントを基礎に据える枠組みの内部においては、社会的なやりとり全般とは言わないまでも、コミュニケーションの要石ではあると広く目されている共通基盤 (Stalnaker 1973, 2002; Clark 1996) を定義しうるものの候補として、共同のコミットメントに白羽の矢が立つ。まず試みに、私たちはある任意の時点 t における会話の参与者 a, b 間での共通基盤を、 t における a と b との共同のコミットメントと同一視してみることができる。 a と b の共通基盤は、彼らがあらゆる種類の言語行為のキャッチ・ボールを交互に続けていくにつれて拡大していき、それと同時に、 a と b が自身の言語行為を遂行するにあたって依拠することになる基礎として機能してもいる。たとえばジャックが皿を洗うことを約束し、かつジルが進んでその手伝いをするとき、ジルの申し出はちょうど彼らの共通基盤に入ってきたばかりのジャックのコミットメントを前提とする。(Geurts 2017: 55; 拙訳)²¹

スタルネイカー²²の言う意味での「共通基盤」は本来、あるコミュニケーションにおける話し手と聞き手との間の「共通信念 (common belief)」——私たちが上で見たような「ジョンが p を知っていて、メアリーが p を知っていて、ジョンがメアリーが p を知っていると知っていて、メアリーがジョンが p を知っていると知っていて……」という無限に続く連言によって表される信念——の集合として定義される。すると、私たちが「ある命題 p (たとえば「地震が起きた」) が彼らにとっての共通基盤になっている」とスタルネイカー的に考え

²¹ “Within a commitment-based framework, joint commitment suggests itself as a natural candidate for defining the notion of common ground, which is widely agreed to be a cornerstone of communication, if not social interaction at large (Stalnaker 1973, 2002; Clark 1996). As a first stab, we may equate the common ground between interlocutors a and b , at a given time point t , with a and b 's joint commitments at t . As a and b toss all manner of speech acts at one another, their common ground expands, while at the same time serving as the basis on which a and b perform their speech acts. For instance, if Jack promises to do the dishes, and Jill volunteers to help, then Jill's offer is predicated on Jack's commitment, which just entered their common ground.” (Geurts 2017: 55)

²² インターネット上で複数のネイティブ・スピーカーの発音を確認したところ、“Stalnaker”の発音としては [ˈstæl.nə.kə] や [ˈstɑl.nə.kə] などが多数派であるように思われる。そのため、敢えてこれをカタカナで表記するならば「スタールナカー」や「ストールナカー」などが実際の音声に近い。こうした事情もあってか、本稿が引用した Walton (1990) の邦訳であるところの田村 (2016) は「ストールナカー」を採用している。しかし不思議なことに、日本の言語学の分野では通例「スタルネイカー」と書くことになっているようである(査読者の一人からいただいたコメントに依拠)。したがって混乱を避けるため、本稿は一貫して「スタルネイカー」を用いることにする。

た場合、それはすなわち、*p* を話し手と聞き手が「信じている」と主張することにほかならない。しかしこの意味での「信じている」は、虚構的でないコミュニケーションこそある程度説明しうるとはいえ、コミュニケーションが虚構的色合いを帯びた（あるいは色褪せた）途端に手放しに受け入れることのできるものではなくなる。ヒーローごっこをする太郎たちは「目の前に怪獣がいる」ということを信じているのだろうか。避難訓練をするジョンたちは「地震が起きた」ということを信じているのだろうか。あるいは『ロミオとジュリエット』を読む私たちは？ このように考えると、冒頭で提起された問題がここでもまさに提起されることになる。ガーツはこれを避けるため、あくまでも「社会的な関係」として共通基盤を定義し直そうとしたのである。

ガーツのこの目論みはある程度成功していると言える。*p* という共通信念が *p* という信念を含意せざるを得ない一方で、*p* に関する共同のコミットメントは、それが社会的な関係であるがゆえに、*p* という信念を含意しなくてもよい。彼はこの特徴を利用して「共同のコミットメントとしての共通基盤」というアイデアを打ち出し、ここへ先ほどの「期限付き共同のコミットメント」という概念を付け加えることによって、共通基盤の内部をいわば「色分け」し、ごっこ遊び的な状況における共通基盤とそうでない状況におけるそれとを区別するという理論を提出した。ここには虚構談話専用のメカニズムは提案されておらず、たしかに彼の当初の目的通り、虚構的な談話を通常の談話の一形態として見るための視座が（大枠としては）提供されていると言えるだろう。

しかしその一方で、ガーツ説は言語外的意味一般、とくに会話の含意 (conversational implicature) を取り扱う際に困難を生じさせる。なぜなら会話の含意は、少なく見積もっても、聞き手が話し手が聞き手が話し手が聞き手にその会話の含意を伝達しようと意図していることを認識するよう意図していることを認識することによって伝達されるものであるからだ。このことを確認するために、グライスによるお馴染みの例を借りよう。ここで「→」は左辺が右辺を会話的に含意することを表す：

(7) A: *I am out of petrol.*

「ガス欠だ。」

B: *There is a garage round the corner.*

(Grice 1989: 32; 原文も斜体)

「その角にガソリン・スタンドがあるよ。」

→そのガソリン・スタンドで給油するといひ。

(8) A: *Smith doesn't seem to have a girlfriend these days.*

「スミスはこのところ恋人がいないようだね。」

B: *He has been paying a lot of visits to New York lately.* (loc. cit.)

「あいつ最近ニューヨークに足繁く通ってるよ。」

→スミスはニューヨークに恋人がいる。

(7) の場合であれ (8) の場合であれ、A が B によって明示的に言われていることだけを受け取ったのではコミュニケーションとしては失敗である。A が明示的に言われていないこと、すなわち「→」の右辺を得るためには、一見すると情報を欠いている B の発話を A がひとまず受け取り、「なぜ B はこの文脈でこんな発話をしたんだろう？」というふうに B の意図を推測する必要がある。そしてその推論がたまたまうまくいって「このことを言外に伝えようとしているのであれば B が会話しているとは言えない」と言えるような意味に辿り着くことができたときに、A は、たとえば「ニューヨークにスミスの恋人がいる」といったことを B の発言に基づいて信じるようになるというわけである。このシナリオの中には不可避免的に「意図」や「信じる」といった心の状態を表す言葉が登場する。この事情は虚構的な文脈においても変わらない。避難訓練に取り組んでいたジョンとメアリーを思い出そう。彼らは今、「車を使って避難しようとしたが、その車はガソリンが今にも無くなりそうだ」という体で訓練をしている（実際にはガソリンは満タンかもしれない）。そうした場面でジョンが (7A) を発話し、それに対しメアリーが (7B) を発話することによって「角のガソリン・スタンドで給油するといいよ」ということを伝達しようとするのは容易に想像できる。この会話の含意の導出過程において、なにか通常のコミュニケーションとは決定的に違うメカニズムが作用しているとは思えない²³。ここでもやはり、メアリーは「角のガソリン・スタンドで給油するとよい」ということを伝えようと意図し、ジョンはその伝達意図を「期限付き共同のコミットメントとしての共通基盤」に基づいて推測し、そしてその推論に基づいてメアリーが仄めかしたことを（ごっこ遊び的に）信じているはずだ。このように、会話の含意の導出を適切に描き出すには共同のコミットメントのみならず、話し手と聞き手の心の状態にも言及する必要があるのである。

そしてより重要なことに、会話の含意の失敗はコミットメントを生じさせ損ねたことによるものではない。たとえば今、A が「スミスはニューヨークに恋人がいる」という会話の含意を受け取れなかったとして、それは「スミスはニューヨークに恋人がいる」ということを A に伝えようと B が意図していることに A が気づかなかったからであり、「スミスはニューヨークに恋人がいる」という命題に沿って行動するよう A に対して B がコミットしている（責任を負っている）ことに A が気づかなかったからでは決してない。というのも、仮にスミスがどの町にも恋人をもっていなかった場合に「スミスはニューヨークに恋人がいるって言ったじゃん！」と B に詰め寄ったとしても、B は「そんなことは言っていない、君が勝手にそう思っただけだろう」と白を切ることができるからだ。つまり、そもそも B は自身が会話の含意によって伝達し

²³ これはもちろん、何か証拠があってこのように言っているのではなく、私がそう思えないと思いたいだけである。通常の場合に行われる伝達と避難訓練の場面で行われる伝達とが、決定的に異なるメカニズムによって成立していると考えていけない理由は何一つないし、実際には全く異なっているかもしれない。したがって、のちの研究によってごっこ遊び中にコミュニケーションを行う場合の私たちの心の状態が通常の場合と著しく異なるということがわかった場合には、本稿の議論は破綻する。とはいえ「通常の場合に行われる伝達と避難訓練の場面で行われる伝達とが、決定的に異なるメカニズムによって成立していると考えていけない理由は何一つない」というのが事実だとしても、決定的に異なるメカニズムによって成立していないと考えていけない理由も今のところはないというのもまた事実である。いずれにせよ積極的にそれを選択する理由がないのであれば、本稿がここでこれを作業仮説として立てていけない理由はない。

ようとしている内容に関していかなる責任も引き受けていないのである。ここで彼が「君が勝手にそう思っただけだろう」と言えることからわかるように、会話の含意とは一般に、話し手よりもむしろその内容を推論によって引き出す聞き手の側に責任が委ねられるような伝達方法なのだ。しかしながら、いくら白を切ることができるとはいえ、Bによって会話的に含意された事柄はスタルネイカー的な意味での共通基盤には含まれているはずである。なぜなら、Bによる会話の含意が成功した場合、その内容はそれに続くAとBとの会話において既知のこととされ、彼らの会話はそれに基づいてある程度方向づけられることになるからだ。すると「共同のコミットメントではないが、共通基盤ではある」という領域がここに見出されることになる。ガーツの目論みとしては、スタルネイカーが「共通基盤」という言葉で捉えようとしたものの全体を「共同のコミットメント」の名の下に定義し直したはずだが、上記のことを踏まえると、コミットメント一本槍で会話の含意を取り扱おうとするのには（それがフィクションであろうとそうでなかろうと）無理があるということになる。ガーツは「コミットメント一般が信念に関してニュートラルである」ということを利用して私たちの「心の状態」から理論を引き剥がし、それによって虚構的な談話と通常の談話とを同じシステムの下に捉えることに確かに成功している。しかし私たちは、何かが会話的に含意された状況を取り扱いたければ、話し手や聞き手の意図や信念といった「心の状態」に言及せずに済ますことはできない。ここから見て取れるのは、ガーツ説だけでは不十分であるということだ²⁴。

6. 虚構録：共通基盤のもう一つの側面

ではどうすればよいだろうか。本稿はこの問題に関して、ガーツが行ったように共通基盤と共同のコミットメントを「同一視」するのではなく、共同のコミットメントはスタルネイカーが「共通基盤」という言葉で捉えようとしたものの一側面に過ぎないとみなすことを提案する。そのためにはやはり、コミットメント主義者たちとは別の文脈で論じられている虚構的コミュニケーションの理論を参照すべきであろう。

虚構的なコミュニケーションを説明するために共通基盤を「色分け」するという発想は、ガーツ以外の研究者にも見られる。たとえば「(言語的) フィクションをコミュニケーションの一形態として捉える」というモチベーションを私たちと共有している²⁵理論家の一人である

²⁴ ガーツは別の論文 (Geurts 2019) で「意図や信念もまたコミットメントの一種である」という形でコミットメントという概念を拡張することによってこの問題を解決しようとしている。たしかに意図や信念もまたコミットメントなのだとすれば、「コミットメント一本槍」のコミュニケーションの理論を作ることは可能であるかもしれない。しかしそうした方策は、コミットメントが本来的にもつはずの「社会的な制約」としての側面を擲つことを暗に含んでいる。この意味でのコミットメントはもはやコミットメントではないだろう。ユニコーンからツノを奪うようなものだ。これについて、たとえば Kinoshita (2022) は、ガーツは一般性を求めるあまりコミットメントという用語の濫用に陥っているという趣旨の批判を行なっている。

²⁵ “[...] [M]ost fiction is conveyed and understood through linguistic utterances, spoken or in writing, and storytelling is a form of communication. The way in which audiences to fictions assemble the information that make up the story is a special case of the way we gather information from the speech of others.” (Stokke forthcoming: 2)

「ほとんどのフィクションは、話し言葉か書き言葉を問わず、言語的発話を通して伝達され、理解される。物語を語ることはコミュニケーションの一形態である。フィクションの鑑賞者がストーリーを構成する情報一つにまとめる際に行なっていることは、私たちが他人の発言から情報を集める際に行なっていることの特異事

Stokke (forthcoming) は、通常のコミュニケーションにおける共通基盤にそのまま対応するものとして「虚構録 (“fictional record”; *ibid.*)」というものを考案し、通常共通基盤とフィクションにおけるそれとを「色分け」するというガーツによく似た方針をとる。ただしガーツ説における共通基盤とは異なり、ストックの言う意味での共通基盤および虚構録は、Currie (2010) や Lewis (1982) に帰される概念であるところの「資料 (corpus)」の集積として理解される。

語り (narrative) は物事を存在するものとして表象し、状況をまさにそのようであるものとして表象する。語り以外の多くのものもこれと同じことをする：それらはすべてデイヴィッド・ルイスが「資料」と呼ぶところのより大きなクラスに属する。彼は例として「誰かの信念体系、年鑑や百科事典や教科書のデータ・バンク、理論や神話体系、あるいはフィクションの作品も」(Lewis 1982: 435) これに含まれるとしている。一つの資料は表象の集まりであり、その資料はそれなりにまとまったソース——ある一人の個人、ある専門家チーム、ある伝統——から発出 (emanate) する。そして私たちの「資料」に対する関心のあり方はある程度似通っているとよい。ある資料——たとえば語りなど——は人工的なものであり、またある資料——たとえば信念体系など——はそうではない。/資料とは、それによれば何かしらが真であるようなもののことである；実際には雨が降っていないとしても、誰かの信念によれば、気象庁からの速報によれば、あるストーリーによれば雨が降っているということが、そのストーリーがフィクションであろうとなかろうと、ありうる。何事かがある資料によれば真であるとき、その資料の発出元であるところの主体は必ずしもその真理性にコミットしているわけではない；誰かの信念体系や歴史的なテキストに関していえばその発出元である主体はそこに表象されている事柄の真理性にコミットしているだろうし、天気予報に関しても同じことが言えるかもしれないが、架空の物語に関してはこの限りではない。「真なるものとして表象する」と「真理性にコミットする」は違うことである。(Currie 2010: 8; 拙訳。下線による強調は引用者による)²⁶

ストックはこうしたルイス＝カリー的理解のもとで「資料」という概念を導入し、任意の時点

例なのだ。」(拙訳)

²⁶ “Narratives represent things as existing, and circumstances as being so. Lots of things other than narratives do that: they all belong to a wider class of things which David Lewis calls *corpora*. His examples are ‘someone’s system of beliefs, a data bank of almanac or encyclopedia or textbook, a theory or a system of mythology, or even a work of fiction’ (Lewis 1982: 435). A corpus is a body of representations, emanating from a more or less unified source — a single individual, a team of experts, a tradition — and in which we may have a more or less systematic interest. Some corpora, like narratives, are artefacts; some, like belief-systems, are not. / Corpora are things according to which something or other is true; it may not be raining in actuality, but it may be raining according to someone’s belief, according to the bulletin from the weather bureau, according to a story, fictional or non-fictional. When something is true according to a corpus, the agents from which it emanates are not always committed to its truth; that will be so for belief systems and historical texts, it may be so for weather reports, it is not so for fictional stories. Representing-as-true and being-committed-to-truth are different.” (Currie 2010: 8)

tにおける a-b 間での共通基盤を「時点 t までの会話（と状況）によれば真であること」の集合、すなわち「会話の参与者（と状況）から発出 (emanate) した一つの資料」として捉えるわけである。

このように共通基盤を捉えることの利点は二つある。まず一つには、共通基盤が「資料」として捉えられる限りにおいて、そこに含まれる個々の情報が必ず「私たちのここまでの会話によれば (according to)」あるいは「あなたの話によれば」という言葉（およびそれによって表される態度）を伴って表象されることである。これにより、共通基盤に含まれる情報一つ一つについて、会話の参与者がそれを必ず信じていなければならないとか、あるいはその真理性にコミットしていなければならないなどといった無理のある想定をする必要がなくなる。たとえば「天気予報によれば明日は雨だ」と私たちが思っているとき、明日は雨だということを信じてもいいし信じなくてもいいし、もちろんコミットしなくてもよい（ただしカリーも言うように、資料の発出元である気象庁は「明日は雨だ」ということにコミットしている可能性が高いことに注意しよう。この二つは別のことである）。そしてもう一つには、共通基盤が資料の「集積」である限りにおいて、たとえ相反する命題であったとしてもそれが基づいている資料の発出元が違えば私たちはそれらを受け入れることができるという点だ。このことは、たとえば「天気予報によれば明日は雨だが、メアリーによれば明日は晴れだ」といった発話／思考が可能であるということからも直ちに了解されよう。ある一揃いの資料の集まりを共通基盤としているとき、私たちは矛盾する命題をも（「によれば」付きで）共有することができるのである。

この見方の下でストックは、「虚構録」、すなわちフィクショナルな談話における共通基盤を「すべての観客 A がそのストーリーの語り手によれば p は真であると信じている」を満たす命題 p の集合 (Stokke forthcoming: 10²⁷) として定義する。虚構録はその発出元が「語り手 (narrator)」であるという点においてのみ、通常の共通基盤と異なる。ここで、虚構録の発出元が「話し手」や「作者」ではないということに注意しよう。ストックが明示的にそのように述べているわけではないが、フィクショナルな文脈におけるコミュニケーションを「ごっこ遊びへの参加」として理解する私たちとしては、フィクションを構成するテキストを作家本人による発話としてではなく、作家が演じている——すなわち作家本人と小道具的対応関係にある——ところの「ストーリーの語り手」による発話として理解せねばならないからだ。そしてこの語り手の発話を聞いている人物は「ごっこ遊びに参加している限りでの私たち」であるのだから、私たちは——ちょうどヒーローごっこにおいて太郎がヒーローと小道具的に対応するが如く——「観客」という身分に対応する小道具となる。すると、「語り手」の話し相手は私たち本人というよりも「観客」であるというほうが正確であるということになる。この意味で、虚構録とは「シェイクスピア（作家）と私たち（読者）との間に成り立つコミュニケーションを支える共通基盤」というよりもむしろ「シェイクスピアが演じている語り手と私たちが演じている観客との間に成り立つ共通基盤」として理解すべきものであるということになる。

²⁷ “the set of propositions p such that all members of A [=an audience] believe that p is true according to the narrator of s [=the story]” (Stokke forthcoming: 10)

ストックが虚構録の定式化の中に「語り手」「観客」という言葉を用いた意図を本稿の議論に寄せて解釈すれば上ようになる。この点で、彼のアイデアは私たちのフィクション理解と整合するものであり、したがって「コミットメント一本槍」では不十分であるという結論に至った私たちとしては、是非ともこの路線で議論を進めていきたいところだ。しかしここで、「すべての観客 A がそのストーリーの語り手によれば p は真であると信じている」を満たす命題 p の集合」という定式化に含まれる全称量化子「すべての」はさすがに条件として厳しすぎるということは指摘しておかなければならない。このように定式化してしまうと、たとえば「ロミオはモンタギュー家の嫡男である」ということを理解し損ねた観客が一人でもいれば、そのことは『ロミオとジュリエット』の虚構録に含まれないということになる。そしてこの事情は「ロミオはモンタギュー家の嫡男である」に限らず、作中のあらゆる事柄に対して遍く成り立つことであるから、ストックがこの定式化にこだわる限り、彼はあるフィクションの語り手が述べた（あるいは前提した、会話的に含意した）事柄全てに関して、それを信じ損ねている観客が一人でもいれば虚構録から取り除く、という立場をとらなければならなくなる。そうして得られた虚構録にはほとんど何も残らないだろう。何か残るとしてもせいぜい「語り手が何かを語っている」ということくらいのものではないだろうか（ある観客が観客としての資格を得ている限り、少なくともこのことばかりは理解していなければならない）。そうだとすれば、私たちとしては観客を全称量化することを避け、存在量化するにとどめることになる。したがって、本稿の採用する虚構録の定義は次のようになる。

[修正版虚構録]

任意の物語 s に関して、「ある観客 A が s の語り手によれば p は真であると信じている」を満たす命題 p の集合

虚構録を上のように修正することで、私たちは上記の問題を回避するとともに、「フィクションをコミュニケーションの一種として捉える」という本稿の（そしてストックの）目的にいつそう即した道具立てを得ることになる。というのも、観劇や読書をしている最中の私たちは、俳優や語り手の話をあくまでも一人で聞いているからである。もちろん、語り手としては多数の観客が念頭に置かれているだろうけれど、それを聞く観客ひとりひとりとしては、たまたま隣に居合わせた別の観客がどのように語りを理解しているかなんて——少なくとも観劇の最中においては——気にしていないだろう。これは3人以上でコミュニケーションをとっている場合とは大きく異なっている。3人の人物 A, B, C が一つの会話に参加しているとき、A は B に伝達された内容をただ理解するのではなく、「C にも当然聞こえているものとして」理解する。B もまた、A に対して発話しつつも、その内容は C にも理解されるものとして発話している。そしてこのときの C としては、B の発話が A に対する応答であると理解しつつも、次に自身が発話するときにはその応答を踏まえた内容を備えた発話をするのが普通である。この状況はすなわち、B の発話によって伝達される内容が「A, B, C の3人で共有されている共通基盤」とい

う名の資料に書き込まれているということにほかならない。この資料はいわば、3人が自由に閲覧できる位置に置かれているのである。これに対して、観劇における虚構録はそのような位置には置かれていない。たしかに私たちは、幕が降りた後に隣の観客に向かって「決闘のシーンすごかったですね」と感想を言うことはできる。ここで「決闘のシーンすごかったですよ」と言うことが奇妙であることを考えると、観客は「自分以外にも観客がいる」という想定、および「自分以外の観客もこのストーリーに関して自分とある程度同じような理解をしているはずだ」という想定を、少なくとも頭の片隅には保持していると考えられる²⁸。しかしこうした想定があるという理解は、あくまでもごっこ遊びの外側における理解であり、観劇をしている真っ最中においては必ずしも念頭に上ることではない、あるいは、観客同士で相互にあからさまなことではない。仮に3人以上でのフィクショナルでない会話と並行的な状況が成立するとすれば、たとえば演目上の演出として俳優が自身の役柄Dとして観客Eに話しかけ、その内容についてさらに観客Fに話を振るような場合であろう。このような場合には、D、E、Fは共同的に一つのごっこ遊びに参加することになり、ちょうど避難訓練中に3人以上で会話する場合と同じようなことが起こっていると考えることができる。DからEへの発話はFにも当然聞こえているものとして、すなわち、3人の間で相互にあからさまなものとして理解されるし、それに続くFの発話も、DからEへの伝達内容を踏まえた上でなされる（し、そうなるであろうということがDやEにとっても当然のこととなっている）からである。反対に、こういった特殊な演出がなされない限りは、ある観客は、俳優や語り手が述べたことが自分以外の観客にも当然聞こえているものとして聞いている必要はないし、俳優や語り手が述べたことが自分以外の観客にも当然聞こえているものとして聞いているということが別の観客にとっても当然のこととなっているということを当然のこととしている必要もない。このように考えると、ある観客とそれ以外の観客との間に共通基盤が発生しているとは考えにくいだろう。このことは、読書をしている場合にはなおのこと尖鋭化する。私たちは通常の読書体験において、自分以外の読者の存在を意識しながら、言い換えれば、小説を構成する語りが自分以外の読者にも聞こえているということを当然のこととしながら（かつそのことを自分以外の読者が当然のこととしているということもまた当然のこととしながら）読書することはまずない。そうした態度を取るのは、葉が本から抜かれた後であり、読者同士で当の作品について語る場合に限られるだろう（そしてそのような場合でさえ、自分が読んだところまで相手もまた読んでいるということを当然視して発話をするのはしばしば「ネタバレ」として響きを買うことになる）。こうした事情を考慮に入れるならば、この段落の第2文で簡潔に述べた「観劇や読書をしている最中の私たちは、俳優や語り手の話をあくまでも一人で聞いている」という見方は決して的外れではないだろう。「虚構録」というものをフィクショナルでないコミュニケーションの共通基盤のフィクションにおける対応物として捉えるという目論みをより誤りなく成し遂げるためには、そ

²⁸ ここには、終助詞「ね」は聞き手にとって既知のことだと話し手が想定しているところの事柄を話し手もまた知っているということを聞き手に伝えるために用いられ、終助詞「よ」は聞き手にとって未知のことだと話し手が想定しているところの事柄を聞き手に知らせるために用いられる、という前提がある。

の定式化における「観客」は——ストックに反して——単数形であるべきである。

さて、上の修正版虚構録を念頭に置き、「共通基盤の資料説」に従うと会話の含意がどのように理解されるのかを確認しよう。いま、フィクショナルでない文脈において、話し手が p を発話によって意味することで q を会話的に含意したとする。ここで共通基盤を「この話し手から発出する資料」として捉えるならば、聞き手は p や q を「話し手によれば真であること」の集合あるいは「これまでの会話によれば真であること」の集合の要素として位置付けることになる。そうすることによって、聞き手は「話し手によれば q は真である」という信念を抱きつつ次の発話を組み立てることになるわけである。ではフィクションの場合はどうだろうか。ロミオがジュリエットに対して p をなんらかの発話によって意味することで q を会話的に含意したとする。この会話の含意はジュリエットに差し向けられたものであるから、 q が書き込まれるのはロミオとジュリエットとの間で共有されている共通基盤である。しかしこのこと全体を私たちが（ごっこ遊びへの参加によって）その小道具となっているところの観客に向けて伝達しているのは、シェイクスピアの演ずる語り手である。語り手は、ロミオによれば q は真である（とジュリエットは思っている）ということ全体を観客に向けて意味する。そして観客はそれを「語り手によれば真であること」として位置付け、語り手と自身との間に共有されている虚構録の中に書き込むことになる。そしてそのこと全体はシェイクスピア本人によって私たち自身（観客としての私たちではなく、フィクションの外にいる人物としての私たち）に伝わるよう意図されていることであるから、『ロミオとジュリエット』という戯曲全体によって伝達される事柄はシェイクスピアから発出する資料となり、私たちと彼の間にある共通基盤に書き込まれることになるだろう²⁹。したがって、ロミオが p を意味した、あるいは会話的に含意したときの「読者としての私（たち）」の信念は次のようになる： p はロミオによれば真であるということは語り手によれば真であるということはシェイクスピアによれば真であり、かつ、 p はロミオによれば真であるということは語り手によれば真であるということを観客は信じている。これを取って図にするならば、図1（次頁）のようになろう。この図において、細い枠線の四角形は既に見た意味での「それなりにまとまったソース」（Currie 2010: 8）を表し、太い枠線の四角形は資料を表す。そして矢印はその始点に結び付けられたソースからその終点に結び付けられた資料が「発出する (emanate)」という関係を表し、太い枠線の内側に記号が配置されていることは、その太い枠線によって表されるところの資料に当の記号によって表されるところのものが書き込まれているということの意味する³⁰。

²⁹ これは些か奇妙に聞こえるかもしれないが、もし今シェイクスピアに対して一読者として連絡を取ることができたとしたら、そこで行われる会話において彼の作品の内容は相互にあからさまなものとして取り扱われるはずである。もちろん、私が近代英語を話すことができればの話だが。（シェイクスピアが現代日本語を勉強してくれるなら、それに越したことはないが）

³⁰ ただしこの図は、読者および読者の演ずる観客の信念状態にフォーカスしたものであるため、ロミオの話し相手の信念や、これが演劇であった場合にロミオを演ずる俳優の意図や信念といったものは省略されていることに注意されたい。図は二次元的であるというその性格上、概念的なものを表そうとすると不正確な部分がどうしても残る。加えて抽象化されたものであるが故に、曖昧性がつきまとうものでもある。したがって図それ自体は、それによって何事かを主張するものとして用いられるべきでない。論文において何かを主張するのは、あくまでもそれを構成するテキストの方であって、図は挿絵にすぎない。本稿は図1によって、何事かを主張

以上の議論により私たちは、前節の「コミットメント説」では捉え難かった「共同的コミットメントではないが、共通基盤ではある」という領域を「資料」という道具立てのもとで捉えることができたと言ってよいだろう。ここで、カリーとそれに準ずるストックが「真なるものとして表象する」と「真理性にコミットする」は違うことである」という立場をとっていることは注目に値する。というのも、コミットメント主義者であるガーツが共通基盤の心理的側面を排除せんがために「心の状態に関してニュートラルである」ということを強調したのに対し、ストックは「資料」としての共通基盤が「コミットメントを含意しない」ということに留意するよう促しているからだ。これは対照的である。一方が他方に関してニュートラルなのであれば、彼らはスタルネイカーが「共通基盤」という言葉で捉えようとした現象の違った側面をそれぞれのしかたで捉えていると考えていけない理由はない。だとすれば、私たちは彼らの立場を統合することができる。すなわち、フィクション的な談話における「共通基盤」は次の二つの側面を持つ：①期限付き共同的コミットメントの集合としての側面；②「語り手」から発出した資料としての側面。

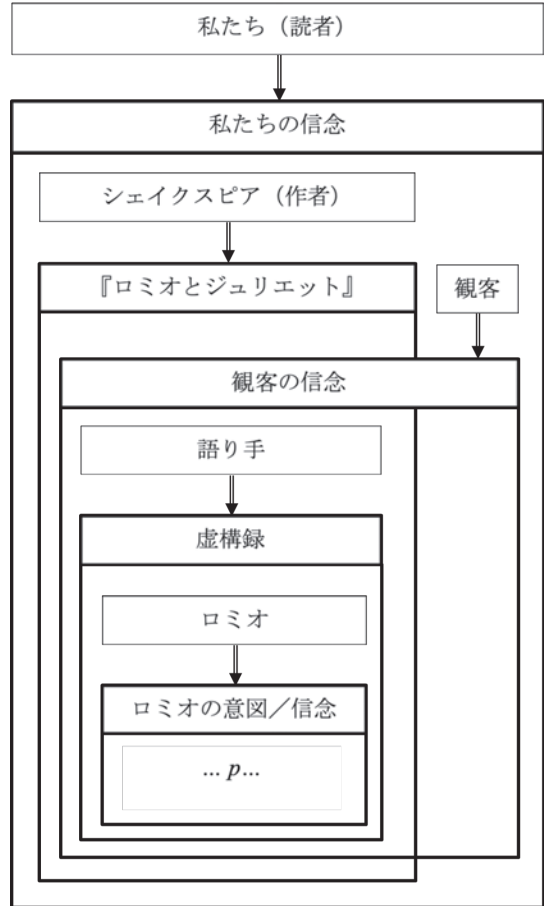


図1：私たちは、pはロミオによれば真であるということは語り手によれば真であるということはシェイクスピアによれば真であり、かつ、pはロミオによれば真であるということは語り手によれば真であるということを観客は信じている、ということを知っている

7. 私はジュリエットが自殺したということを知っているのか

私たちがここまでに入れた手がかりは、私たちが冒頭で確認した直感、すなわち、悲劇を鑑賞する私たちが「信じるふり」や「悲しむふり」をしていないという直感を支えてくれるのだろうか。ここにおいてこそ、本稿の議論の価値が試されるはずだ。

まず2節で確認した「Xをするふりをする」という表現が表しうる状況の下位分類、およびそれを予測すると目される仮説を再掲しよう。

(9) a. 彼は {死んだ／寝た／泣く／殴る／殺す／声を出す} ふりをしている。 (作例)

することはおろか、主張するふりさえしていない。

- b. 彼は {主張する／約束する／質問する／命令する／依頼する} ぷりをしている。
(作例)
- c. 彼は {結婚する／相続する／チェスを指す／サッカーをする} ぷりをしている。
(作例)

(10)「X をするぷりをする」という表現が X に関する代行含意を持つのは次の I・

II が共に成り立つとき、そしてそのときに限る：

- I. X が慣習的行為を表す表現である。
II. X が表象的内容を持つ行為を表す表現である。

本稿の理解では、「X をするぷりをする」という表現が「X を成立させるための手続きが代行されている」という含意——代行含意——を生じさせるためには、X が表す行為が慣習的で(=条件 I)表象的内容を持つ(=条件 II)ものである必要があり、かつそうであれば十分なのであった。この条件は、(9b) に列挙されるような種類の「発語内行為 (illocutionary act)」が典型的にこれを満たしている。それゆえ (9b) の表現は代行含意を生じさせるが、他方 (9a) に示される行為は条件 I・II を、(9c) におけるそれらは条件 II のみを満たさないがために、それぞれの表現が代行含意を生じさせないという分析を施した。この分析のもとでは、論理的にもう一つのカテゴリーの存在が示唆される。すなわち、条件 I を満たさず、条件 II を満たす行為のカテゴリー、「慣習的でなく、表象的な行為」のカテゴリーである。

本稿が問題にしている「信じる」はこの第 4 のカテゴリーに属する。というのも、何かを信じることは、ちょうど悲しむことがそうであるように、共同体の慣習なしに行うことができ、かつ、ちょうど主張がそうであるように、信念は明らかに表象的内容を持つ(さもなくばそれは何も信じていないということにほかならない) からだ。他者の心的表象と言語との関係を研究する分野においてしばしば “John believes/asserts that p” のように書かれる³¹ことから、「信じる」は「主張する」の仲間であるかのように思われがちだが、上記の仮説 (10) が正しければ、「責任主体を移し替えている」という意味での——つまり代行含意を生じさせる意味での——「信じるぷり」をすることはできないということが予測される。そして実際できないのではないかと私は思う。ここで言う「信じるぷり」とは、「信じているように見えるように振る舞うこと」ではない。いかにも雨が降っていると信じているかのように振る舞うことであれば、私たちはいくらでもできる。たとえば晴れの日にはレイン・コートを着て長靴を履いて散歩をするなどすれば良い。しかしこの場合は「本当は信じていない」ということが成立してしまっている。これは「代行含意を生じない方の「ぷり」」をしているのである。私たちは代行含意を生じさせる仕方では信じるぷりができるかどうかを調べたいのだから、私たちとしては「自分ではない誰か

³¹ これはものすごく大雑把に言えば「p を主張する行為を口でやるか心でやるかが違うだけで、態度としては同じである」という考え方を反映した書き方だと思っていただいて構わない。同様の対応関係として “John wants/orders Mary to do” などがある。

がそれを信じているのは確かなのだが、その信じるための手続きは自分が代わりにやってあげている」が真となるような形で「信じるふり」をしている事例を発見せねばならないのだ。したがってここで問題にしているのは、「信じているように見えるように振る舞う」という態度ではないということになる。では「自分が雨が降っているということを信じているということを想像すること」はどうだろうか。たとえばあなたは心の中で「あ、雨降ってる」と言葉にしてみるかもしれない。しかしこれでは、雨が降っていると信じているときに自分が言いそうな言葉を心の中で再現しただけであって、依然として「本当は信じていない」ということが成り立っている。では単に「雨が降っていることそのものを想像すること」であればどうか。残念ながらこれもダメである。というのも、雨が降っていることを想像するとき必ずしも私たちはそれを「不真面目に信じている」とは限らないからだ。雨が降っていることを想像することは、私たちが単にそれを信じているだけの場合にも伴われる心的過程であるため、もし雨が降っていることを想像することがすなわちそれを不真面目に信じていることであるなら、私たちは日常的に雨が降っていることを信じてそれを信じるふりをしていることになる。これは明らかな矛盾であろう³²。ではどうすればよいのだろうか。舞台上の俳優が役柄として何かを主張する場

³² これを「論理的な矛盾」ではないと考える人もあるかもしれない。たとえば「彼は雨が降っているということを主張しつつ、それを主張するふりもしている」という文の意味が通るような文脈として、舞台上で「雨が降っている」と発言する人物のありようを記述するという場面を挙げることができる。彼はある意味では主張し、また別の意味では主張するふりもしているからだ。しかしこのケースは、ルースな言語使用によってこそ成り立っていると言わねばならない。というのも、ここで並列されている述語であるところの「主張する」と「主張するふりをする」が共通して自身の主語としている代名詞「彼」の指示対象が、前者を解釈する際には役柄、後者のそれとしては役者本人でなければならないからだ。たまたま主語となるべき表現の形が同じだからといって、意味が異なるにもかかわらずそれを一つにまとめることは一般に認可されないということになっている。たとえば「くもは水滴の集まりでありつつ八本足でもある。」といった文はレトリックとしてはもちろん可能かもしれないが、普通は認可されない。こうした事例はむしろ、普通は認可されないからこそレトリカルに響くと言べきだろう。これに対して「いや、レトリックでなくても、文字通りの意味としてすでに容認可能だ」という人がいるかもしれない。この種の例文を検討している言語学者が「なんか言えるような気がしてきた」と言い出すのは日常茶飯事であるが、よろしい、百歩譲ってこれが文字通りに解釈可能であるとしよう。しかしそうした場合、「くも」を「くも」という音列によって表すことのできるもの」のように読み替えてはいないだろうか。たしかにその場合の「くも」は通常の名詞句となり、それに従って後続する述語も通常の解釈が可能になるが、これはここで問題にしているような「形が同じだからといって意味が違うものを一つにまとめている事例」では最早なくなっている。これでは反論にはならないだろう。これに対しては、さらに次のような指摘があるかもしれない——いや、それこそ反論になっていないだろう。あなたは「彼は主張しつつ主張するふりをしている」で用いられている「彼」が同時に二人の人物を指しているかと解釈しているようだが、それは誤りだ。この文は「彼はナポレオンとして p を主張しつつ、彼自身としては主張するふりをしている」とパラフレーズすることができる。このように「何として」行為しているのかが省略されていると考えれば、主語に立つ「彼」の指示対象はあくまでも彼自身であり続ける。他方で、ある何らかの対象「くも」が、あるときには気象現象として振る舞い、またあるときには生物として振る舞っているわけではないのだから、「くもは気象現象としては水滴の集まりでありつつ、生物としては八本足でもある」のように言い換えることはできない。それゆえ、「くもは水滴の集まりであり八本足でもある」という文が ill-formed であることをいくら示したところで、「彼は主張しつつ主張するふりをしている」という文が「同様に」不適格であるということを示すことにはならないだろう——と。ここで問題を明確にするためにここで「彼」を「ジョン」に変えて指示を固定してみよう。すると問題の文は「ジョンは雨が降っているということを主張しつつ、それを主張するふりもしている」となる。なるほど、反論者の言うように、「役柄として」「彼自身として」という表現が省略されていると考えればこの文も同様に容認可能となり、従って「主張しつつ主張するふりをしている」は矛盾ではないということになるだろう。このような「省略説」は、ちょうど「青い目の少女が緑色の目をしている」という文が「レンの絵画の中では、青い目の少女が緑色の目をしている」のように言われれば容認されるという現象と同じことがここでも起きているという主張として捉えることができる (cf. Fauconnier 1994)。つまり反論者は、フォコニエが言うところの「スペース導入表現」にあたる「レンの絵画の中では」「この演劇では」「ナポレオンとしては」が場合によって

面では、もし仮にそのセリフが脚本に書かれたものであるということを知らない人物がその主張を聞いたとすれば、その人物にとっては俳優が本気でその主張をしているように見えるだろう³³。これと並行的に考えるならば、心を読める超能力者がいたとして、その人物から見て（読んで）あたかも本気で雨が降っていると信じているかのように見えるように心の状態を維持すればよいということになる。そんなことができるだろうか。仮にできたとして、それはもはや単に雨が降っていると信じているのではないだろうか。

以上のことは、私たちには「信じるふり」をすることが（少なくとも「主張するふり」をするのと同じ仕方では）できないということを強く示唆している。この観察は本稿の仮説(10)=(5)の正しさをほんの少しだけ実証してくれる観察である。またこれに加えて、「不真面目に信じる」ということができないという結論は、ジュリエットが自殺したということを信じるふりをしていたわけではないと私たちが考える道が拓けたことを意味する。私たちはジュリエットが自殺したということを信じている。ただしもちろん、次のような意味においてである：まずシェイクスピアによって開かれているごっこ遊びに私たちは、ウォルトン的な意味で「参加」する。その参加資格は、私たちが「語り手としてのシェイクスピア」によってもたらされる「かくかくしかじかのことを想像せよ」というひと揃いの規則を受け入れ、それに従うことによって得られる。これはガーツ的に言い換えれば、「一時的な共同的コミットメントを二者（シェイクスピア演ずる語り手と私たちの演ずる観客）の間で結ぶ」ということであるし、ストッケ的に言えば「シェイクスピア演ずる語り手から発出される資料を受け入れて共有する」ということでもある。この2種類の言い換えはスタルネイカーが「共通基盤」という名の下に捉

は省略可能であるということを描いているのである。そうだとするとこの指摘は、異なるメンタル・スペース（この場合は演劇と現実）のそれぞれで起きているということにすれば「主張しつつ主張するふりをする」が矛盾しない、と言っているだけである。これは「現実世界にとどまっている限りは、女の子の目が青くかつ緑色であることがありえない」ということを認めるのと同様に「現実世界にとどまっている限りは、『主張し、かつ主張するふりをする』ことはできない」ということを暗に認める姿勢にほかならない。であれば、反論者の提出する議論はやはり「ジョンは雨が降っているということを主張しつつ、それを主張するふりもしている」がおかしな文であるという私の主張に対する反論にはなっていないということになる。私は現実の話をしているのである。いや、そうではない——反論者はおも続けるかもしれない——私が言いたいのは形式が同じであることを理由に複数の人物を「彼」でまとめて指すことができるということではないし、複数のメンタル・スペースを考慮に入れば矛盾がなくなるということでもない。一般に発語内行為として何かを主張することは、すなわち何かを主張するふりをするものではないか、ということだ——と。確かにそうかもしれない。私たちが何かを主張するという行為を遂行するとき、「自身が述べている内容を自身が主張しているものとして提示している」というのは事実であろう。これは「役者が自身をナポレオンとして提示する（＝ナポレオンのふりをしている）」ということを行っていることと並行的であるように考えることもできよう。しかしそれは、「私たちの言語使用一般には社会的な体裁を取り繕う機能があって、本当の内心など誰にもわからない」ということを、「言語行為にはそもそもふりとしての側面があるのだ」という形で言い表しているに過ぎない。この表現に含まれる「ふり」は、この注が付された箇所と問題にしている「ふり」、すなわち「真面目である」の対義語としての「ふりをしている」ではない。ある人は役者としての側面と学者としての側面と音楽家としての側面を持っているかもしれない。こうした場合に「3つの顔を持つ彼の素顔が知りたい」だとか「今の彼は音楽家を演じている」などといったように表現することはできる。ではこの人物は「真面目でない」のだろうか。彼は不真面目に音楽をやっているのだろうか。そんなはずはないだろう。このように考えると、「言語行為一般が（対外的な）ふりとしての側面を持つ」というのは確かに事実であり、それゆえ「彼は雨が降っているということを主張しつつ主張するふりもしている」をこの意味で解釈することももちろん可能である（その場合、「主張する」と「主張するふりをする」は同じ意味の述語の言い換えだということになる）ということになるが、そのことを指摘したとしても、本稿の言う「矛盾」が矛盾でないということを示したことはないのである。

³³ 俳優は大根役者ではないと仮定する。

えようとしたコミュニケーションの要石の表と裏を成しており、その要石の力を借りて私はヴェローナの街に飛び交う会話の含意を理解し、やがて訪れる悲劇を引き受けて涙する。この結論は、辛い体験を語る友人を気の毒に思うときと悲劇を鑑賞して胸を痛めるときとで、私たちの態度になにか決定的な差があるとは思えない、という素朴な直感を掬い取ってくれる結論である。私は（その友人によれば）友人が辛い体験をしたということを信じている。全く同様に、私は（語り手によれば）ジュリエットがロミオの後を追ったということを信じているのである。

参考文献

- Currie, Gregory (2010) *Narratives and narrators, a philosophy of stories*. Oxford, NY: Oxford University Press.
- Geurts, Bart (2017) Fictional commitment. *Theoretical linguistics* 43(1-2): 53–60.
- Geurts, Bart (2019) Communication as commitment sharing: speech acts, implicatures, common ground. *Theoretical linguistics* 45(1-2): 1–30
- Gilbert, Margaret (2014) *Joint commitment: how we make the social world*. Oxford, NY: Oxford University Press.
- Grice, H. Paul (1989) *Studies in the way of words*. Cambridge: Harvard University Press.
- Kinoshita, Soichiro (2022) Can a commitment be ironic? Commitments in Grammar and Discourse.
- Lewis, David. (1982) Logic for equivocators. *Noûs* 16, 431–414.
- Lewis, David (1983 [1978]) Truth in fiction. *Philosophical papers* 1: 261–280.
- Searle, John. (1975) The logical status of Fictional Discourse. *New Literary History* 6: 319-332.
- Stalnaker, Robert C. (1973) Presuppositions. *Journal of philosophical logic* 2: 447–457.
- Stalnaker, Robert C. (2002) Common ground. *Linguistics and philosophy* 25: 701–721.
- Stokke, Andreas (forthcoming) Fiction and importation. *Linguistics and philosophy*.
- Walton, Kendall (1990). *Mimesis as make-believe: On the foundations of the representational arts*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (田村 均 (訳) 2016 『フィクションとは何か：ごっこ遊びと芸術』名古屋：名古屋大学出版会)

Do We Believe that Juliet Committed Suicide? Serious Semantics on Non-serious Narratives

Soichiro KINOSHITA
gingerale@asagi.waseda.jp

Keywords: fiction, pretense, conversational implicature, common ground, make-believe, joint-commitment, communication, corpus, according-to

Abstract

This paper argues that the notion of *common ground*, which is generally regarded as a set of beliefs that the interlocutors mutually hold to be true, is to be taken to have two complementary aspects: (1) an assembly of *joint commitments* that takes place between the speaker and the addressee, and (2) a collection of *corpora*, viz., things according to which something is true. I will show that reformulating common ground in this way helps us adequately explain how human communication works, be it fictional or non-fictional, and that it further allows us to maintain our intuition that we do believe what is said or communicated in fictional discourse, rather than just pretend to believe it.

(きのした・そういちろう 東京大学大学院)